神戸の舞台に立った俳優たち　他

米田　哲夫（竹の台）

（INDEX）

仲代達矢、奈良岡朋子、栗原小巻、杉村春子	神戸の舞台に立った俳優たち(1)　(2019. 9)
仲代「ハムレット」と「伊右衛門」	神戸の舞台に立った俳優たち(2)　(2019.10)
大女優・杉村春子『女の一生』他	神戸の舞台に立った俳優たち(3)　(2019.11)
杉村春子さんの神戸での舞台は・・・(上)(下)	神戸の舞台に立った俳優たち(4)　(2020. 1)
杉村春子さん 神戸での最後の舞台(上)(下)	神戸の舞台に立った俳優たち(5)　(2020. 2)
面白さ、深さを味わった滝沢さんの名演技	神戸の舞台に立った俳優たち(6)　(2020. 4)
アメリカの悲劇を演じた二つの舞台	神戸の舞台に立った俳優たち(7)　(2020. 5)
衝撃的なデビュー西田敏行	神戸の舞台に立った俳優たち(8)　(2020. 6)
「ギャング　アルトゥロ・ウィ」	神戸の舞台に立った俳優たち(9)　(2020. 7)
最も多く神戸の舞台立った奈良岡朋子	神戸の舞台に立った俳優たち(10)　(2020. 8)
奈良岡朋子の「グレイクリスマス」	神戸の舞台に立った俳優たち(11)　(2020. 9)
今も華ある輝く俳優―神戸を愛した栗原小巻	神戸の舞台に立った俳優たち(12)　(2020.10)
「故郷へ帰る…神戸」　栗原小巻(上)(下)	神戸の舞台に立った俳優たち(13)　(2020.11)
清烈神戸に現れた加藤剛	神戸の舞台に立った俳優たち(14)　(2020.12)
その愛三部作　人間加藤剛	神戸の舞台に立った俳優たち(15)　(2021. 1)
若くして逝った天性の俳優　太地喜和子	神戸の舞台に立った俳優たち(16)　(2021. 2)
舞台で日傘(パラソル)が似合う太地喜和子	神戸の舞台に立った俳優たち(17)　(2021. 3)
舞台に演劇運動に命を燃やし続ける佐々木愛	神戸の舞台に立った俳優たち(18)　(2021. 4)
さらなる演劇への未来をつないで 佐々木愛	神戸の舞台に立った俳優たち(19)　(2021. 5)
日本の演劇・・を支えた名優たち―東野栄治郎	神戸の舞台に立った俳優たち(20)　(2021. 6)
新劇の名作を支えた名優―佐野浅夫、下條正巳	神戸の舞台に立った俳優たち(21)　(2021. 7)
有馬稲子、黒柳徹子	神戸の舞台に立った俳優たち(22)　(2021. 8)
中村梅之助、緒方拳、熊倉一雄	神戸の舞台に立った俳優たち　(23)(2021. 9)
滝沢修、宇野重吉	神戸の舞台に立った俳優たち(24)(2021. 10)
樫山文枝、日色ともゑ、米倉斉加年	神戸の舞台に立った俳優たち　(25)(2021. 11)
米倉斉加年、北林谷栄	神戸の舞台に立った俳優たち(26)　(2021.12)
滝沢 修	神戸の舞台に立った俳優たち(27)　(2022. 1)
ハムレットとパンデミック	神戸の舞台に立った俳優たち　(28)　(2022.3)

生活の問題とは何か ― 上田耕一郎　(2022.7)

無名の俳優たちが創った名舞台（2022.10）
神戸で観た感動の芝居 ②　東京演劇アンサンブル公演「奇跡の人」（2022.11）
神戸で観た感動の芝居 ③ 前進座公演「出雲の阿国」（2022.12）
神戸で観た感動の芝居 ④ 神戸の舞台に初登場―井上ひさしの舞台
テアトル・エコー公演「道元の冒険」「11匹の猫」（2023.1）
神戸で観た感動の芝居 ⑤ 神戸の舞台に名作の数々―井上ひさしの舞台
こまつ座公演「父と暮らせば」（2023. 3）
神戸で観た感動の芝居 ⑥ 神戸の舞台に初登場―井上ひさしの舞台
「紙屋町さくらホテル」「化粧」（2023.5）

「炎の人」文化座紹介（2023.10）
女性の生きざまと沖縄にこだわった劇団「文化座」　（2023.11）
韓国の国民的詩人―ユン・ドンジュ（尹東柱）の舞台「星をかすめる風」を観ませんか？
（2023.12）
神田香織さんが所属していた劇団「東京演劇アンサンブル」の紹介舞台（2024.1）
新年早々、おしゃれな喜劇を楽しみませんか
ヴォードヴィルのスター加藤健一と佐藤B作の最高傑作　（2024.2）
70周年を迎えた神戸演劇鑑賞会　（2024.4）
からゆきさん　（2024.5）
足尾銅山から水俣へ　（2024.6）
一人芝居の魅力　（2024.8）
追悼－西田敏行　（2024.11）

仲代達矢、奈良岡朋子、栗原小巻、杉村春子……（2019. 9）
神戸の舞台に立った俳優たち(1)

米田哲夫　（竹の台）

再来年に西神中央駅から歩いて 5 分ほどのところに 500 席ほどの文化芸術ホールができます。こんな身近で神戸で下駄ばきで行ける劇場があるでしょうか。
私たち西神や西区、地下鉄沿線の人たちが素敵な文化芸術に触れることができ、そして何よりも子どもや孫たちが、児童憲章(1951 年)にあるように「全ての児童が人として尊ばれ…自然を愛し、科学と芸術を尊ぶ」、そんな児童に育まれていく、私たちの街の文化を育てていきたいと願っています。
そういった文化・芸術を考え、作り出していく上で、ささやかですが私が観てきた演劇の中から、神戸の舞台に立った俳優さんとその舞台の感想・感動を少しばかり紹介していきたいと思います。

私は、1962 年から今日まで、旧の国際会館、文化ホール(中)、文化ホール(小・海員会館)で芝居を観てきました。それは神戸演劇鑑賞会(旧神戸勤労者演劇協議会―略称神戸労演)の会員として観た新劇が中心になります。
神戸の舞台に立った俳優たちは…
健在する俳優としては、仲代達矢、奈良岡朋子、栗原小巻、樫山文枝、日色ともゑ、佐々木愛、江守徹、西田敏行、渡辺徹、高畑淳子…
故人となった俳優としては、滝沢修、杉村春子、宇野重吉、東野英治郎、北林谷栄、大滝秀治、中村梅之助、加藤剛、緒方拳、太地喜和子…

先ず、トップバッター。 私は、健在する俳優の中で最高の名優、それは仲代達矢さんだと思っています。
仲代さんの舞台、最初の出会いは、1964 年7月、俳優座公演『ハムレット』(ウイリアム・シャクスピア作・千田是也演出)と同年 12 月、俳優座公演『東海道四谷怪談』(鶴屋南北作・小沢栄太郎演出)でした。くしくも、ヨーロッパと日本の古典でした。
仲代さんとは舞台の前に、すでに映画で、小林正樹監督の「人間の条件」(59 年)、「切腹」(62 年)、黒沢明監督の「用心棒」(61 年)「椿三十郎」(62 年)「天国と地獄」(63 年)の映画を見ていました。いずれも今でも心に残っていますが、とりわけ「人間の条件」は戦争の悲惨さと人間の生きていく素晴らしさを、まだ 10 代の私に強烈な印象を与えてくれました。
そんな中での、2000 人近くようする国際会館の舞台での仲代ハムレット、どんな感動を覚えたのでしょう。次回に…

仲代「ハムレット」と「伊右衛門」　（2019.10）

神戸の舞台に立った俳優たち（2）

米田哲夫　（竹の台）

1964年、7月仲代達矢（当時32歳）さんとの初めての出会いは、シェクスピアの『ハムレット』（千田是也演出）。もう55年も経つが、映画「人間の条件」「椿三十郎」などの仲代達矢が〝ナマ〟で見られる、そんな期待感があった。1800人入る旧国際会館の大ホール、仲代さんのやや甘い声でのハムレットの流れるようなセリフまわし、新劇俳優としてはやや大きめな体を、これもやや内股での奔放な体の動き、そしてハムレットが交わる俳優との流暢なやり取りなどを覚えている。

しかし、まだ20歳の私には、シェクスピアのハムレットの面白さや、奥深さを理解して感動するには若すぎていた。それでも仲代ハムレット見たという喜び感は残っている。また、オフィーリアは市原悦子（当時28歳）が演じ、彼女の澄んだ明るい声は今も耳に残っている。他にハムレットの友人のホレーショは平幹二郎、墓堀人に東野栄治郎、他兵士や楽士たちに加藤剛、山本圭、田中邦衛、佐藤オリエ等テレビ、映画で活躍していた劇団俳優座の俳優総出演。この公演は神戸労演10周年、俳優座20周年記念公演だった。

当時の会員の感想文から

「ルネサンス期の若者―マントをぱっとひるがえした印象的な登場から、4人の隊長に担がれて武人らしく舞台を去る仲代ハムレット…オフィ―リアは素晴らしかった。気狂う前の市原は全く可憐そのものだった。そして気が狂ってからは独断場だった。」

この後、シェクスピアの舞台は随分見ていくが、6年後の1970年の仲代達矢のオセロ、中野誠也のイアーゴの『オセロ』、71年の山本圭のハムレット、佐藤オリエのオフィ―リアの『ハムレット』、そのあたりからシェクスピア、ハムレットの面白さが感じられるようになった。

64年12月は仲代達矢の時代劇『東海道四谷怪談』（小沢栄太郎演出）。歌舞伎の古典を、現代に生きる私たちにも通じる新劇の『四谷怪談』4時間に及ぶ舞台だったが殆ど時間の長さは感じられなかった。印象に残っているのは、時代劇は映画で試し済みの仲代が華やかで美しかった伊右衛門。

これも当時の感想文

「幻想的な音楽、颯爽とした仲代、女の悲しさ、弱さ、執念を力一杯表現する大塚（道子）、市原の演技等4時間という時間を感じさせない楽しい芝居でした」

仲代さんの神戸での舞台はその後
・1967年12月『どれい狩り』安倍公房作、千田是也演出、岩崎加根子
・1974年2月『リチャード3世』シェクスピア作、増見利清演出、岩崎加根子
・1975年2月『どん底』ゴーリキー作、増見利清演出、佐藤オリエ
・1975年9月『令嬢ジュリー』ストリンドベリー作、隆巴・他演出、栗原小巻
・1977年2月『ジュリアス・シーザー』シェクスピア作、増見利清演出、加藤剛
・1978年10月『オイディプス王』ソポクレス作、隆巴演出、神崎愛

この後、今日まで続いていくが、仲代さんは、俳優座を退団して1978年に妻宮崎恭子(隆巴)と共に、無名塾を作り俳優養成を行う。石川県能登演劇堂は1995年に完成し仲代さんは名誉館長になる。以降は次号に。

神戸の舞台に立った俳優たち(3)　(2019.11)
大女優・杉村春子『女の一生』他、神戸での舞台

米田哲夫　(竹の台)

仲代さんの舞台は、前号以降、2015 年まで続きます。できれば最後に触れたいと思います。
前号で述べた仲代さんと出会った 1964 年。その年に日本を代表する二人の男女の俳優の舞台を観ることができました。一人は杉村春子さん。杉村さんの十八番と言われている『女の一生』(森本薫作、演出久保田万太郎・戌井市郎)と『欲望と言う名の電車』(テネシー・ウイリアムズ作、演出木村光一)です。もう一人は滝沢修さん。これも数多くある滝沢さんの名舞台の一つ、『夜明け前』(第一部)(島崎藤村作、村山知義脚色、演出久保栄)です。二人とも、築地小劇場以来の新劇の苦難の歴史の中で生まれ、育った俳優で、戦後の新劇、いや日本の演劇界や映画界に大きな足跡を残した、私流にいえば、日本で最も優れた俳優だと思います。

杉村さんの『女の一生』は 69 年 4 月(旧国際会館)、89 年 3 月(神戸文化ホール・中)と、『欲望と言う名の電車』は 75 年 8 月、79 年 5 月(いずれも神戸文化ホール)と神戸で三度ずつ上演されています。
『女の一生』は、戦前、1945 年 4 月東京大空襲のもと、渋谷東横映画劇場で最後の新劇公演として初めて上演されました。杉村さん 39 歳でした。

明治、大正、昭和と生きた布引けい。家のため、家族のため、ひたむきに耐えて生きた女の一生、そして、戦争が終わった焼け野原で、けいは、「だれが選んでくれた道でもない。自分で歩き出した道ですもの」と言う有名なセリフは、杉村さん自身の人生の代名詞のように言われていますが、舞台

を見る私たちに、それは若者であれ、長く歩んだ人たちであれ、「自分で歩き出した道」は生きる道標となるのであり、心に沁み込んだセリフとなり私たちに深い感動を刻み込みました。杉村さんは、戦前の築地座において名女優田村秋子さんから多くの芸を学びながら、静かで、きっりとしまった語り口、自然でリアルな表現は、文学座の太地喜和子さや新橋耐子さん始め多くの女優さんに大きな影響を与えました。そのセリフまわしは今でも、私の耳に残っています。

影響と言えば杉村さんを尊敬してやまなかった文化勲章の森光子さんは、「放浪記」上演回数は日本記録と言われています。それは全くすごいことですが、私流にいえば、森さんの「放浪記」は一つの劇場での記録です。杉村さんの『女の一生』は、北は北海道釧路から鹿児島まで、それこそ全国津々浦々、体育館のような大きな劇場でも、しかも低料金で「女の一生」を 70 年近く演じ続け、演劇の素晴らしさ、楽しさを拡げていった女優は二度と現れないでしょう。
杉村さんは 19 年文化勲章の受賞に決まりましたが、戦前、多くの俳優たちが弾圧下のもと、演劇を守り続けた人たちを想い、文化勲章を辞退したことも付け加えておきます。
私の杉村さんと出会いは、震災の前年の 12 月（1994 年）『ふるあめりかに袖はぬらさじ』まで続きます。88 歳でした。

神戸の舞台に立った俳優たち（4）　（2020. 1）

杉村さんの神戸での舞台は、震災前の94年12月まで続く（上）

米田哲夫　（竹の台）

杉村さんは、どんな女優さんか。少しでも知っていただくために若干の略歴を述べてみます。先ず、1924（大正14）年の築地小劇場以来の女優です。
この小劇場は、日本の新劇運動がはじめて持った演劇の拠点（劇団名も築地小劇場）でした。若き小山内薫、土方与志たちによって創設され、それまでの歌舞伎や新派にはない新しい演劇をと、演劇革新の意気に燃える若い演劇人が集まり、新しい演劇を創造し、観客と楽しんでいく歴史的な劇場でした。約500人の観客席（西神中央にできる文化芸術ホールも500人収容）をようする、バラック建ての建物でした。あの戦禍をくぐり抜けようとしましたが、昭和15年に当局により、国民小劇場と改称され、昭和20年の東京大空襲で焼失してしまいました。その築地小劇場へ広島からでてきた杉村春子は研究生として参加しました。（杉村さんは広島弁を是正するのに随分と苦労された）。

大正から昭和へと日本の侵略戦争は拡大されていき、日中戦争から太平洋戦争へと進み、日本はファシズム化していきました。1937（昭和12）年、岩田豊雄、岸田国生、久保田万太郎たちによって文学座は創立し、杉村春子はそのメンバーの一人でした。創立あいさつに「…政治主義を排し、

真の意味における精神の“娯楽”を提供したい」と謳ったが、戦時体制下ではいわゆる”芸術主義“をつらぬくことも容易ではありませんでした。新協劇団・新築地の劇団は強制解散させられ、国策高揚のため移動劇団がつくられていきました。昭和20年8月6日、移動演劇桜隊は広島で被爆し、丸山定夫や園井恵子ら9人が亡くなりました。
「女の一生」は、1945（昭和20）年4月、に上演されました。戦前最後の劇場公演で、杉村さんは「『女の一生』をやっている時、空襲が始まったんですよ。その時、防空壕の中で話すことって、芝居のはなしばかり、わたしもう、爪でどこでもいいからひっかいて、穴をつくって顔つっこみたかったほどこわかった」と語ってます。

戦後がはじまりました。俳優座を始めとして、民藝、文学座など殆どの劇団が戦後の解放感の中、旺盛な演劇創作活動が行われました。とりわけ地方へも公演活動を拡げ、全国各地で演劇鑑賞組織（労演）が生まれていく手助けも劇団はしました。文学座は1949年に付属研究所を設け、さらに福田恒存や三島由紀夫をも加わり戦前からの伝統を守って創作活動を続けます。詳細は省きますが、杉村春子・文学座にとって大きな試練が訪れます。
それは、60年安保闘争後、福田恒存を中心に神山繁，岸田今日子、小池朝雄等、そして三島由紀夫中心に中村伸郎、丹阿弥谷津子等の脱退と二度の分裂を味わうことになります。そこで杉村・文学座への応援・支援は様々の形で行われていきますが、その一つに観客組織の労演が文学座の舞台を積極的に取り上げていきます。前述した「女の一生」「欲望と言う名の電車」に次いで大きな印象に残っているのが、水上勉の処女戯曲「山襞」（66年3月国際・大）でした。4時間に及ぶ杉村主演の舞台は、日本の風土の冷たさや悲しさを、水上戯曲を通して私たちに感じさせてくれました。水上さんはこれ以降、自らの小説の舞台化は全て自らが戯曲化するようになりました。
なお、この舞台で、昨年亡くなった、樹木希林さん、当時は悠木千帆で国際会館（大）に立っていますが、私の記憶には残っていません。（下につづく）

神戸の舞台に立った俳優たち（4）　（2020. 1）
杉村さんの神戸での舞台は、震災前の94年12月まで続く（下）

米田哲夫　（竹の台）

神戸では、以降殆ど毎年のように文学座の舞台が取り上げられていきます。　また、あの当時、三ノ宮駅中心の職場の労演のサークルが昼休み食事会を行い、そこへ杉村さんが参加されたのを覚えています。ただ、いつどんな芝居だったかが思いだせませんが、杉村さんと食事ができるは大きな喜びでした。労演が発足してから、公演で神戸に来た新劇団は、各職場のサークルと交流が幾たびかもたれました。私の職場サークルへも「夜明け前」の演出補の人と女優阪口美奈子さんが昼休み来られたのを思いだします。僅かの時間でしたが食堂は超満員となり、演劇サークルは大きく発展しました。

1973年10月に待望の神戸文化ホールが完成しました。地元劇団や在京の劇団の協力もあってできた文化ホールは、当時、日本で最もいいホールとして各劇団から推奨されました。当時の宮崎市長は「仏を造るのは行政、それに魂を入れるのは市民の人たち」と名言を残されました。これからできていく音楽や演劇のホールは、宮崎さんの言葉をかみしめながら、私たちは神戸の地に素晴らしい文化芸術を築いていけるようにしたいですね。

杉村さんの文化ホール初舞台は、三遊亭円朝作「怪談牡丹灯籠」（1974年9月）でした。乳母お米を演じた杉村さん。押し殺された心憎いほどの女の情念をさりげなく燃やす演技・ふるまいは、円朝の世界を見事に創出した戌井市郎演出もあって、芝居らしい芝居を観たと感想がよせられました。

分裂後、不安と苦悩の中、再出発した文学座。杉村さんを中心に、北村和夫、高橋悦史、江守徹、太地喜和子らの俳優陣、そして、日本で最も優れた演出家木村光一が育ち、文学座の素晴らしい舞台は神戸で上演されていきました。当時杉村さんは「労演さんありがとう」という声をよく耳にしました。

1967年2月　「シラノ・ド・ベルジュラック」E・ロスタン作　木村光一他演出　三津田健、杉村春子
1968年1月　「薔薇よりも孔雀だ」小山祐士作　木村光一演出　杉村春子
東野栄治郎（俳優座の東野さんが杉村さんのために応援出演）
1969年4月　「女の一生」
1969年7月　「握手・握手・握手」飯沢匡作　演出　金内喜久夫
1969年10月　「阿Q外伝」宮本研作　木村光一演出　北村和夫、加藤武
1971年3月　「美しきものの伝説」 宮本研作　木村光一演出　江守徹、太地喜和子、藤田弓子
1971年9月　「にごりえ」水木洋子作　戌井市郎演出　杉村春子
1972年2月　「聖グレゴリーの殉教」宮本研作　木村光一演出　北村和夫
1972年8月　「沈氏の日本夫人」飯沢匡作・演出　杉村春子　北村和夫
1973年1月　「飢餓海峡」水上勉作　木村光一演出　高橋悦史、太地喜和子
※ここまでは国際会館大ホール、以降は文化ホール
1974年5月　「ドン・ジュアン」モリエール作　加藤新吉演出　江守徹、太知喜和子

そして、「牡丹灯籠」へと続いていく。杉村さん68歳でした。女優としていっそう深化し、あの震災の前年の12月、感動の出会いまで続きます。

神戸の舞台に立った俳優たち(5)　(2020. 2)

杉村春子さん　神戸での最後の舞台、私たちと交流(上)

米田哲夫　(竹の台)

阪神淡路大震災から今年は25周年。神戸演劇鑑賞会、当時は神戸労演。事務所のあった国際会館は倒壊、演劇公演をする文化ホールは損傷、3000名会員の大半が被災。多くの会員は、ほぼ40年続いた鑑賞団体は解体するのではと不安がつのった。しかし、全国の鑑賞団体からの義援金や励ましのメッセージ。劇団、俳優さんたちの来神や励ましの言葉(最後に紹介)、そして各劇団のボランテイア公演等により、その年の10月、3000名会員復帰の感動と喜びの再開例会を行うことができました。

さて、地震がおきた前年の12月、杉村さん主演の「ふるあめりかに袖はぬらさじ」を上演。有吉佐和子さんが「杉村さんに大芝居をしてもらう喜劇を」と言って書かれた作品。江戸末期に遊郭での「攘夷女郎」を描き、文字通り女優杉村春子が、文学座を担う新橋耐子さんたちに引き継いでいくもので、私たちにとっても大女優最後の舞台となった。これも何かの“縁”なのでしょうか、杉村さんは私たちの熱望に応えて、舞台終了後の会員との交流会の場にも出席してくださった。88歳の老齢に鞭打って、新橋さんたちに支えてもらいながらの大女優との舞台以外での出会いは夢のような集いでした。

個人的ですが、大震災の翌年2月、文学座の研究所での公演の後、ばったりと浴衣姿の杉村さんに出会い、杉村さんから「神戸のみなさんお元気ですか」と声をかけられました。杉村さんとの最後の出会いで、翌年1997年4月4日に亡くなられました。91歳でした。

さて前号では、74年9月「怪談牡丹燈籠」まで紹介しました。
75年8月「欲望という名の電車」テネシー・ウイリアムズ作　木村光一演出　北村和夫
76年8月「電信お玉」大西信行作　戌井市郎演出　三津田健
80年8月「乱―かな女覚書」宮本研作　戌井市郎演出　小林勝也
84年10月「続・二号」飯沢匡作　戌井市郎演出　山本優子
86年2月「欲望という名の電車」T・ウイリアムズ作　江守徹演出　北村和夫
87年4月「華岡青洲の妻」有吉佐和子作　戌井市郎演出　高橋悦史
89年3月「女の一生」森本薫作　戌井市郎演出　江守徹
92年3月「アナザータイム」ロナウド・ハーウッド作　加藤武演出　北村和夫
94年4月「ウエストサイドワルツ」アーネスト・トンプソン作　江守徹演出　稲野和子
そして、94年12月「ふるあめりかに袖はぬらさじ」と続いたのです。(下につづく)

神戸の舞台に立った俳優たち(5)（2020. 2）

杉村春子さん　神戸での最後の舞台、私たちと交流(下)

米田哲夫　（竹の台）

杉村さんには幾つかの翻訳劇(ヨウモノ)出演作品があります。どの作品も素晴らしい舞台成果ですが、なかでも3度も神戸の舞台に立った「欲望という名の電車」に触れておきます。前にも書きましたが「女の一生」と並んで杉村さんの当たり役です。「欲望という名の電車」に乗って「墓場」と言う名の駅で降りるブランチ。1930年代のアメリカニューオーリンズ、貧しい白人と黒人が住む「極楽」と言う町。そんな町へ白い帽子に白いスーツでふらりと姿を見せる。それを杉村さんがその華やかさと、やがて訪れるみじめな未来を見事に漂わせての登場。今でも目に焼き付いている。過去の夢に浸り、くちはてた嘘と空虚な欲望、それでも生きようとするブランチ。私たちに衝撃的な感動を与えた杉村ブランチは名作中の名作です。

かなりのスペースをさいて杉村さんを書きました。すでに亡くなられて20数年。未だに杉村さんの舞台に出会ったことは、私にとって大きな財産です。

最後に、あの震災の際、たくさんの俳優さんたちから励ましの来神やメッセージやいただきました。何人かのお名前を記させていただきます。

杉村春子、仲代達矢、加藤剛、有馬稲子、栗原小巻、佐々木愛(佐々木さんはあの日から今日まで1月17日には花束を送っていただいています)他。

代表して加藤剛さんのお手紙

「心からお見舞い申し上げます。天の試練にしてはあまりにも大き過ぎ、辛過ぎ、悲し過ぎる災いでした。気持ちを表すに言葉はあまりにも貧しいですが、親愛なる友人、神戸労演の皆様、頑張って、はねのけて歩き続けてと祈らずにはいられません。「ロマンス」稽古場にて　加藤 剛」

神戸の舞台に立った俳優たち（6）（2020. 4）

舞台の楽しさ、面白さ、深さを味わった滝沢さんの名演技

米田哲夫　（竹の台）

1 はじめに

アジア太平洋戦争末期、演劇や文化が弾圧され、劇団も解散、舞台に立てなくなり、農業をしていた折、滝沢さんを訪ねて一人の俳優が、演技指導を求めて現れました。それは長谷川一夫さんでした。戦争が終わり、長谷川さんは、銀幕の輝ける大スターとして、滝沢さんは新劇の神様として、戦後の映画、演劇をリードしてきました。その二人が、1964年、NHK の今日の大河ドラマの基礎をつくった「赤穂浪士」で共演したのでした。長谷川一夫さんが大石内蔵助、滝沢修は吉良上野介を演じました。戦争、戦後を俳優として生きてきた二人の名優にどんな思いが去来していたのでしょうか。

滝沢さんの舞台、初めての大きな感動は、「夜明け前」第1部で、翌年の「第2部」でした。

20歳、この時から、数々の滝沢さんの名舞台にであいました。芝居の面白さ、深さ、俳優の魅力やセリフの重み、舞台と客席の緊張感、あらゆる楽しさを感じました。また、芝居を通して、人間が生きていくうえでの大切なこと、歴史や、社会、時代を見る目、人を愛する喜びや、語り合う楽しさをも味わいました。

2『夜明け前一部・二部』島崎藤村作、村山知義脚色、久保栄演出

「夜明け前」（1934年初演）は、新劇誕生の築地小劇場（1924、大正13年）以来、苦難の歴史を歩んできた新劇の最高に到達した舞台でした。それを民芸が戦後新劇の黄金期と言われる時代に戦前の舞台を再演したのです。

明治という時代に、自らの理想と違った時代の矛盾に苦しんだ青山半蔵を描いた『夜明け前』。島崎藤村（藤村は築地小劇場の会員1号でした）の長編の原作を脚色した村山知義。庄屋青山家を舞台全体にしっかりと据えた舞台装置。亡くなった久保栄の演出を踏襲して松尾哲司が補・演出。舞台奥から木曽節が聞こえてくる中、幕はあがると青山家がどっしりと構える。芝居は全編この青山家を据えたまま、明治にぶつかり悩み苦しみ死んでいく半蔵を描いていました。一部の終わり、半蔵は青山家の鴨居に手をかけて「もうすぐ夜明けだ」と未来を匂わせながら、第二部の終わりには、時代に押しつぶされ狂っていく半蔵、蕗の葉を頭にかぶり、火のついたマッチ棒を持って舞台をさまよう半蔵・滝沢修。鳴りやまぬ大きな拍手、カーテンコールは木曽節が聞こえ、半蔵も妻お民も誰もいない青山家のみを残した舞台で、深い感動でした。なお、妻お民は第一部は吉行和子さん、第二部は奈良岡朋子さんでした。他に、芦田伸介、大滝秀治、日色ともゑさんたち総出演で、宇野重吉さんは朗読でした。

次回はアーサー・ミラー「セールスマンの死」から始めます。

※余はなし
演劇人が待ち望んでいた国立第二劇場（第一は歌舞伎など古典芸能）が　　年に旗揚げ。第1回公演が「夜明け前」と井上ひさしの「紙屋町さくらホテル」でした。こけら落としに、新劇の名作「夜明け前」が上演されたのは象徴的でした。演出の木村光一が一部二部を一挙に脚色して、加藤剛さんが半蔵を、お民は樫山文江さんが演じ、木曽の杉木立が乱立させた妹尾河童さんの舞台装置これも圧巻の舞台でした（神戸では未上演）。
また、「夜明け前は」、1980、81年に民芸で再再演されました。演出等は踏襲されましたが、補・演出は滝沢さんで、滝沢さんは半蔵の父を演じ、半蔵は鈴木智、お民は樫山文枝さんでした。

神戸の舞台に立った俳優たち（7）（2020. 5）
アメリカの悲劇を演じた二つの舞台（アーサー・ミラー作品）　滝沢修3
米田哲夫　（竹の台）

滝沢さんの「当たり役」と言われているのは「夜明け前」の青山半蔵。「オットーと呼ばれる日本人」のオットー、「炎の人」のゴッホ、そして「セールスマンの死」のウイリー・ローマンです。今回はそのウイリーを紹介します。

「セールスマンの死」　民藝公演
アーサー・ミラー作　菅原卓訳・演出（75年は滝沢修補演出）

重たいトランクを両手に下げて舞台下手からとぼとぼと登場、疲れ果てたウイリー・ローマンは滝沢修。若いころは大きな成果を収めていた車のセールスマン。今は解雇されてしまった63歳。未来が明るかった息子たちは今は無職。家から冷蔵庫までローンづけ。上演は、1966、1975年、まさに高度成長真っ盛りの時代。ウイリーの悲劇はいつ私たちの生活に襲いっかてくるかわからないリアリティ感。滝沢さんの夢を見ていた若いウイリーから年老いて命を落とすまでのリアルな演技は、時代のリアリティ感も相まって私たちに衝撃的な感動を与えてくれました。ラストはウイリーの妻リンダ（66年小夜福子、75年は細川ちか子）が舞台中央に小さな花束を前にして、たった一人座って「家の支払は今日で済ませました。今日ですよ。ところが住む人がいなくなってしまって…」静かな拍手が起こったのを覚えています。
66年には、当時、将来、俳優として嘱望されていた中尾彬。寅さんのおいちゃんを演じ続けた下条正己が国際会館の舞台に立ちました。

また、つい先日亡くなった久米明さんは、96年に劇団昴で文化ホールの舞台でウイリーを演じています。

「るつぼ」　民藝公演
アーサー・ミラー作　　菅原卓訳　演出（62年菅原卓、72年渡辺浩子）

62年の「るつぼ」は19才の私には、ほとんど記憶に残っていません。72年の「るつぼ」は、人間の気高さ、尊厳を心に響かせてくれた感動の作品でした。
アーサー・ミラーは、1953年マッカーシズム（共産主義者狩り）吹き荒れるアメリカを舞台に17世紀の魔女狩りを借りて描いた作品です。映画・演劇関係者もその嵐に巻き込まれ非米活動委員会に招へいされ、偽りの告白を強いられました。
主人公ジョン・プロクタのことを忘れられないアビゲイルという女の子が、プロクタの妻エリザベスを魔女として告発し、村中に「魔女狩り」が吹き荒れます。プロクタは魔女狩り裁判で、ダンフォース判事から偽りの告白をすれば処刑しないと働きかけられます。プロクタは告白し、告白書に署名をしようとしましたが、ダンフォースはその名前をさらに利用しようとします。プロクタは告白書を破り処刑場を登っていきます。
雑駁なあらすじを書きましたが、マッカーシズムやファシズム等が吹き荒れる中、敢然と自らの名前を守る、つまり人間の気高さや尊厳を、20代後半の私の胸に刻み込んでくれた舞台でした。滝沢さんは、この時、魔女狩りを作り上げる側のダンフォウース判事を「憎々しく」演じました。この「憎々しさ」がプロクタの気高さをいっそう際立せました。私はこの舞台を観てからは、どんな困難な中でも、苦しみながらも気高く生きる人に出合った時、いつもジョン・プロクタを思い出します。
72年のプロクタは新田昌玄、エリザベスは奈良岡朋子、この芝居を文字通り引き回した魔女アビゲイルは草間靖子（素晴らしい好演）でした。

神戸の舞台に立った俳優たち（8）（2020. 6）
衝撃的なデビュー西田敏行

米田哲夫　（竹の台）

滝沢さんの舞台はまだまだ続きますが、ここで一息。現在、映画やテレビで活躍している俳優たちの神戸での舞台を紹介します。 コロナでの非常事態宣言が解消されましたが、俳優たちの激減した仕事を、アンケートを取り、その実情を政府に申し入れている日本俳優連合。2400名の俳優が参加し理事長が西田敏行。その西田さん、神戸での舞台初登場は

「写楽考」　矢代静一作　石沢秀二演出　　劇団青年座　1972年公演

物語は江戸の乱世のころ、謎の天才絵師東洲斎写楽を中心に十返舎一九、喜多川歌麿3人の若者の生き様を通して、「生きるっていいことだ」と、当時は多くいた若者たちに勇気を与えてくれた作品でした。写楽（役名は伊之」を演じたのが西田敏行でした。天才肌でありながら生意気でぶきちょな写楽を見事に演じた。当時はまだ25歳。青年座の研究所をでての大抜擢。台本を読んだ段階でこの役は俺だと自信たっぷり。

たぶん青年座（1954 年に俳優座養成所出身の山岡久乃、初井言榮、森塚敏たちで設立、日本の創作劇にこだわってた劇団）の名プロデューサー（劇団では制作者）金井影久が若き西田の優れた才能を見出しての抜擢ではないかと思っていました。2000名近く入る国際会館の客席は西田敏行の優れた演技や表現力に驚き大きな拍手に沸いた。当時の若い観客の感想は「一つのことをやりとげなきゃ」「心の安らぎを求めて」「甘さを思いしらされた」等々、多くの感動が寄せられました。

全く個人的な思いですが、この舞台の後、西田敏行は舞台で、映画でテレビで名優と言われるほどになっていったのは皆さんがご承知のとおりです。優れた才能を持った俳優は、本人のたゆまない努力により才能を花咲かすことは当然です。一方で客席の熱い感動がその俳優の成長に貢献することができる、観客にそんな喜びや楽しみがあるのではないかと西田敏行さんの舞台での出会いに思いました。その後も、舞台と客席の感動の芝居にたくさん巡りあうことができました。

その後、西田敏行の神戸での舞台以下のとおりである。

・1079年10月「盟三五大切」（かみかけてさんごたいせつ）
　鶴屋南北作、石沢秀二訳・演出　　若山富三郎、木の実ナナ
・1981年12月「冒険ダン吉の冒険」 宮本研作　五十嵐康治演出
・1982年12月」「江戸のろくでなし」矢代静一作　鈴木完一郎演出　高畑淳子、田中邦衛

国民的名優　田中　邦衛さん

1960年代から70年への当時の若者たちに、生きること、愛すること、働くこと等、当時の若者たちにとってあこがれ的存在であった映画、テレビの「若者たち」。その長男佐藤太郎（あと4人の兄弟は橋本功、山本圭、佐藤オリエ、松山省二、松山以外は全て俳優座）、そして「北の国から」の黒板五郎役の国民的俳優田中邦衛さん。言うまでもなく舞台出身の俳優。俳優座養成所第7期生をでて俳優座に入団。やはり主には映画出演であったが、神戸へは

・1959年「幽霊はここにいる」 安倍公房作　千田是也演出　三島雅夫
（私は見ていません）
・1964年「ハムレット」 仲代達矢主演　オズリック（廷臣）役で出演している。そして、
・1969年に「おさえればとまる　アルトゥロ・ウイの栄達　ギャング　アルトゥロ・ウィ」
　20世紀最高の劇作家と言われてるベルトルト・ブレヒト作（代表的な作品は「三文オペラ」他）
　演出は千田是也。 以下次号に。

神戸の舞台に立った俳優たち（9）（2020. 7）

俳優座公演 おさえればとまる アルトゥロ・ウイの栄達

「ギャング アルトゥロ・ウィ」（1969年）

米田哲夫 （竹の台）

映画界では大きな位置を占めていた田中邦衛の主演舞台。ブレヒト作の舞台は前後して主に俳優座千田是也演出で、数多く日本で神戸で上演されていた（「三文オペラ」「肝っ玉おっ母とその子供たち」「コーカサスの白墨の輪」「「プンティラ旦那と下僕マッティ」「セツアンの善人」等々）。

この作品「ギャング アルトゥロ・ウィ」のウイはカポネであり、場所はシカゴ、かつウイをヒットラーという名に置き換えればわかりやすい。1941年ブレヒトはフィンランドに亡命して、ファシスト、ヒットラーの本質を描いた作品。舞台は道化も登場し笑いを誘いながら、ウイが栄達していく姿を具体的なヒットラーの台頭事件を思い起こさせながら描かれ、その栄達を抑えることができたのかを考えさせてくれる。私にはやや苦手の感があったブレヒト、田中邦衛の懸命の演技に巻き込まれながらも消化不足に終わった。出演者も俳優座ほぼ総出演で、三島雅夫、加藤剛、河内桃子、中谷一郎たち。舞台の感想は「むつかしい」「しんどかった」などが寄せられた。ただ私は今でも思い出すのは、我が国の首相が、テレビの前の演説で右を向き、やがて左を向いて「キレイな」言葉を発して「演技」しているのを見て、50年前のウイを思い出す。それは、民衆を引き付けていくために、役者から演説の際身振り手振りを教わっていたことを。いまだに、憲法改正を叫んでいる我が国の首相、抑えれば止められるのだろうか。

映画、テレビに大きな影響を与えた俳優座養成所

田中邦衛が3回も受験し、ようやく第7期生となった俳優座養成所について少し書いてみたい。1949（昭和24）年に千田是也を中心とした俳優座演劇研究所付属俳優養成所が、単に俳優座のためだけでなく演劇界全体を考えて発足した。戦後の貧しさが漂っていた時に3年の俳優養成機関として生まれた。第2期から公募制をとり、多くの演劇青年たちが受験し、16期まで続き623人が卒業した。卒業生には、岩崎加根子、仲代達矢、中谷一郎、平幹二郎、市原悦子、田中邦衛、河内桃子、加藤剛、山本圭、佐藤オリエ、栗原小巻、そして小沢昭一、渡辺美佐子、山本学、小山田宗徳、楠侑子、樫山文枝、高橋昌也、山崎努、石立鉄男、三田和代、太地喜和子、さらに佐藤慶、宇津井健、浜畑賢吉、林隆三、原田芳雄、前田吟、村井国生、地井武男、夏八木勲たち（赤字は神戸の舞台に立った人たち）で、いうまでもなく映画、テレビ界の隆盛に大きな貢献をした俳優たちであった。18年間の養成所は幕を閉じて、翌年には桐朋学園大演劇科に引き継がれていく。

次回からは今、活躍中の女優さんたちを紹介したい。やはりトップバッターは奈良岡朋子さんです。

神戸の舞台に立った俳優たち（10）（2020. 8）

最も多く神戸の舞台立った奈良岡朋子
今も旅公演を続ける日本を代表する女優

米田哲夫　（竹の台）

神戸勤労者演劇協議会（略称神戸労演）が誕生したのは1954年7月ぶどうの会の「夕鶴」（木下順二作、演出岡倉士郎）主演山本安英と「スカパンの悪だくみ」（モリエール作、岡倉演出）久米明主演だった。奈良岡朋子はその前々月5月に、たぶん御影公会堂の舞台（「神は知っていた」アルマン・サドクル作、岡倉士郎演出）に立っている。それから2014年5月「8月の鯨」（デヴィット・ベリー作、演出丹野郁弓）まで、なんと60年、神戸に来ている。

さらに、90歳になった今、井伏鱒二作、朗読劇一人舞台「黒い雨～八月六日広島にて、矢須子～」丹野郁弓演出で、このコロナ禍の中、下関、福岡、佐賀と旅公演を続けている。杉村春子同様、高齢になっても演劇の楽しさを全国に広げている。ぜひ、劇団民芸のホームページを開いて、「黒い雨～」をご覧になってください。

数多くある奈良岡朋子の舞台何を紹介しようかと悩んでしまう。やはりこの舞台から始めたい。1969年1月民藝公演「イルクーツク物語」（A・アルブーゾフ作。宇野重吉演出）である。初演時の1960年12月の神戸初演、私は見ていない。

「人間恋をすると光に向かう花のようにしゃんとするっていうけど本当かな」で始まる舞台。ギリシャ悲劇にまなんだ4人のコーラス隊（男性3人、女性1人）を舞台の進行役に配置した宇野演出は、当時大きな反響を呼んだ。

旧ソ連邦のシベリア開発で働く若者たちを描き、その中心は食料品店で働くワーリャを奈良岡朋子が演じた。エクスベーターで働く若者に恋をし、二人の子供をもうけ、事故で夫を失った後、同じ現場で働く若者たちに助けられ、やがて再びその若者の一人と結婚していくワーリャ。奈良岡朋子は清新で、はつらつとしていてあの若々しい声は，当時のソ連邦の国づくりをすすめる労働を象徴するかの如く私たちの胸を揺さぶった。

初演は60年安保の暮れ、再演は70年安保の前年の1月、若者たちに、政治への不信、働くことへの不満等が漂っていた中で、ワーリャの人を好きになっていく愛の有り様は、「光に向かうはなのように」「しゃん」していく感動を呼び、若かった私にも強い印象を残した。下元勉、鈴木瑞穂、山内明、垂水吾郎、中尾彬、佐々木すみ江、松本典子らが若者らを演じ、宇野演出により素晴らしいハーモニーとアンサンブルを生み出した。この舞台に感動した私たちは、何年たってもこの舞台を語り継ぐようになっていた。

当時の感想を紹介してみる。

・感動と反発の入り混じった複雑な気持ちだ。人を変えうるその無限の可能性を見た感動は、今度もそれにもまして強く感じた。（28歳男）
・登場人物が、あんなにも美しく生き生きとした舞台を観たことがない。国の成り立ちを嘆いても仕方がない。その違いを認めて出発しよう。（27歳男）
・コーラス、それに舞台装置は夫々スマートでアカヌケしていた。（公務員女25歳）
・宇野重吉の演出は、作者の魂を大河のように我々につたえます。それは情緒的であると同時に生き生きと躍動している。（29歳男）
・愛の力、美しさ、生きがいがいつまでも失われないよう、日常の私たちを励ましてくれるでし ょう。（28歳女）

私事で申し訳ないが、この年の10月結婚した私。友人たちが結婚式にこの舞台の風景を大きな紙に描いて、式場に貼りだしてくれた。
冒頭の「スカパンの悪だくみ」の作者モリエール。先般、コロナが発生した劇場「シアターモリエール」。モリエールからきている。1600年代のフランスの喜劇作家。「ドン・ジュアン」「タルチェフ」「守銭奴」「いやいやながら医者にされ」など数多く神戸の舞台で上演されている。
さて、次にどの舞台を紹介しようか迷ってしまうが/・・・

神戸の舞台に立った俳優たち（11）（2020. 9）
劇場に凛と響いた憲法9条 奈良岡朋子の「グレイクリスマス」

米田哲夫 （竹の台）

とりあえず、奈良岡朋子の神戸での舞台、私のわかる範囲で取り上げてみたい。
1）1964年4月 民藝公演 「父と子」A・アルブーゾフ作 宇野重吉演出 共演山内明
2）66年9月 民藝 「私はカメラだ～ブルリン日記」 ジャン・ヴアン・ドルーテン作 菅原卓演出 共演下元勉
3）67年8月 民藝 「うちのお姉さん」 ア・ボロージン作 早川昭二演出 共演樫山文枝
4）69年1月 民藝 「イルクーツク物語」
5）71年1月 民藝 「想い出のチェーホフ」エマ・マリューギン作 宇野重吉演出
チェーホフが交わした手紙のみを、俳優が朗読しての舞台づくり。俳優の力量、簡素な舞台、音と照明のみで見事に作り上げた宇野演出至高の舞台。奈良岡朋子はチェーホフの妻クニッペル、チェ―ホフは鈴木瑞穂。
6）74年3月 民藝 「桜の園」 チェーホフ作 宇野重吉演出 共演滝沢修、米倉斉加年
7）75年8月 民藝（以下民藝）「迷路」 野上弥生子作 宇野重吉演出 共演梅野泰靖
8）77年5月 「奇跡の人」 ウイリアム・ギブソン作 渡辺浩子演出 共演土部歩

9)79年7月 「雨」 サマセット・モーム作　若杉光夫演出　共演里井正美
10)80年7月 「居酒屋」 エミール・ゾラ作　内山鶉演出　共演梅野泰靖
11)82年9月 「とよはた雲に入日さし」 伊東弘允作　　滝沢修演出　共演滝沢修
12)83年3月 「夢二・大正さすらい人」 吉永仁郎作　共演米倉斉加年
13)84年9月 「セールスマンの死」 アーサー・ミラー作　滝沢修演出
14)86年2月 「払えないの？払わないの？」 ダリオ・フォ作　渡辺浩子演出　共演大滝秀治
15)86年9月 「転落の後に」 アーサー・ミラー作　渡辺浩子演出　共演夏木マリ
16)89年7月 「イルクーツク物語」 宇野重吉演出
17)92年1月 「渇いた季節の中に…」 デビット・ヘア作　高橋清祐演出　共演南風洋子
18)93年1月 「グレイ・クリスマス－五条家の人々ー」 斎藤憐作　渡辺浩子演出

「ブラッククリスマス」ってご存じですか。1941年12月25日、香港がイギリス統治から、軍事力で日本の占領下になっていったその日を、”ブラック・クリスマス”と呼ばれている。
「グレイクリスマス」は、1941年朝鮮生まれの劇作家斎藤憐の渾身の力作です。1945年敗戦のクリスマスから、1950年朝鮮戦争勃発の5年間の物語。栄華を誇った伯爵五条家が没落、五条の妻華子(奈良岡朋子)は、英語と社交術で将校クラブのホステスをしながら家計を助ける。日系二世の米将校から新しい戦後の世界を知る。また、五条家を支えたのは満州帰りの朝鮮人権藤。斎藤憐にとって戦後民主主義は子供の頃のあこがれであったその戦後とは、民主主義とはと、ほぼ私たちと同世代の斎藤が問いかけてくる。この舞台の圧巻は、雪の降るクリスマスの夜、警察に追われる権藤が五条家を飛び出す。やがてウインナーワルツのオルゴールが聞こえてくる。それに合わせて華子が舞い始める…。そして、「…この憲法が国民の保障する自由及び権利は、国民の不断の努力によって…国権の発動たる戦争と武力による威嚇または武力の行使は…これを放棄する…」憲法12条から9条へと、おそらく舞台では初めてであろう憲法を奈良岡朋子が謳いあげる。静まり返った劇場に凛と響き渡る。

奈良岡朋子の舞台は、この後、2014年(「8月の鯨」丹野郁弓)まで続く。この間、私から見て、男女の最高の俳優、仲代達矢との共演(2007年3月「ドライビング・ミス・デイジー」丹野郁弓演出)もあり、私たちを楽しませてくれた。
奈良岡朋子はチェーホフ、アーサー・ミラーはじめ様々な劇作家、宇野重吉から丹野郁弓まで多くの演出家たちの世界や意図をしっかり受け止め、優れた演技力で表現し、何よりも誰もの耳にも快く響くそのセリフで、客席との空間を豊かにし、舞台の醍醐味を味合わせてくれた俳優である。

次回からはさらに現役で活躍する俳優たち。そのトップバッター、栗原小巻を紹介する。

神戸の舞台に立った俳優たち（12）（2020.10）

今も華ある輝く俳優　―　神戸を愛した栗原小巻

米田哲夫　（竹の台）

芥川賞受賞三浦哲郎原作の「忍ぶ川」を熊井啓監督で映画化された（1972 年）。哲郎、志乃の純愛を加藤剛、栗原小巻が共演した。白黒映画、雪の降る初夜、二人が寄り添って馬車から聞こえる鐘の音を聞くシーンは今も思い出す。若い私にとって、あこがれの愛の形として胸に焼き付いた。

1967年に大河ドラマ「三姉妹」に出演した翌年、国際会館で栗原小巻と舞台ではじめて出会った。俳優座公演、チェーホフの「三人姉妹」、小沢栄太郎が演出をし、三人姉妹オーリガは河内桃子、マーシャは岩崎加根子、そしてイリーナが栗原小巻であった。まだまだチェーホフの面白さがわからなかった私には、チェーホフの美しいセリフに酔ったそんな印象が残っている。清新で美しい栗原小巻は20代前半で、俳優座では最も期待されていた。ほかには、平幹二郎、中谷一郎、古谷一行、原田芳雄、三島雅夫らが舞台に立っている。

栗原はその後、様々な作品で神戸の舞台に立っている。

1970年9月には田中千禾夫作・演出の「冒険・藤堂作右衛門の」で俳優座の重鎮東野英治郎と共演している。

72年は田中千禾夫作・演出、時代劇「八百屋お七牢日記」。一途な恋ゆえに、火を放ち火あぶりになるお七を演じた。はじめての老け役にも挑戦した。

そして、75年、仲代達矢と共演「令嬢ジュリー」。ストリンドベリ―作を千田是也が訳し、仲代の妻隆巴（他一人と）が演出し、文化ホールでの初舞台となった。終幕後、「ジュリーはとってもやりたかった」と熱が入ったインタビューに応じてくれ、初めての文化ホールには「とってもいい小屋、みなさんに楽しんでもらえる芝居をつくらなきゃ」と、舞台人小巻面目躍如だった。

ちなみに個人的で全く申し訳ないが、たまたま、終演後仲代さん、小巻さんと食事をする機会があり、私が一緒に会場へ行くことになり、文化ホール前でタクシーを待っているとき小巻さんが現れた。舞台上ではない小巻さん、暗い夜の街でこんなに美しい人がいるのだろうかと、心がときめいたのを今もしっかり覚えている。

77年はF・ヴエーデント作、千田是也演出「ルル」。共演は永井智雄、中野誠也他

79年はシェクスピアの「アントニーとクレオパトラ」演出は千田是也。このころからお師匠千田さんとの舞台が多くなる。共演は中谷一郎他

80年、ブレヒト作、千田是也演出「コーカサスの白墨の輪」。共演、大塚道子、永井智雄ほか

82年、ブレヒト作、千田是也演出「食肉市場のジャンヌ・ダルク」。共演、小沢栄太郎ほか

83年、フリードリヒ・シラー作、千田是也演出「メアリ・シュチュアート」。共演、川口敦子
84年、田中千禾夫作、千田是也演出「貴族の階段」。共演、阿部百合子、福田豊士ほか
86年、ブレヒト作、千田是也演出「セツアンの善人」共演、磯場勉ほか
88年、S・アリション作、S・コールスキー演出、「恋愛論」。共演、鈴木瑞穂、池田勝

これまでの芝居は劇団俳優座が制作したものであったが、この作品は、はじめて小巻さん自身が企画し、弟加来英治と作った演劇事務所「エイコーン企画」が制作した舞台。また、劇団以外の俳優、名優鈴木瑞穂、池田勝とも共演した。物語は、クリミヤ半島の美しい街で美しい女性リューバ(栗原小巻)が観光ガイドをしていて、そこへ二人の男性が現れて3人の愛がはじまる。手紙のやり取りを中心に、ほとんど派手な動きのない、俳優のセリフが見事で、セットも簡素で、愛とは老とはを静かに問いかけてくる舞台でした。俳優座で、シェクスピア、チェーホフ、ブレヒトと世界的作家の舞台に出演していた小巻さんが初めて挑戦した作品で、新しい小巻さんの魅力に客席は驚いた。17歳の男性の感想は「40年後にもう一度見てみたい」とあったが、30数年経ち、私ももう一度見たい、また多くの人に見てほしいと思っていて、加来さんにも進言しているがまだ実現していない。 この後、昨年,12月、小巻さんの舞台は続く。この間、俳優座退団、神戸市との関りや観客とのつながり等をお知らせしたい。

神戸の舞台に立った俳優たち(13) (2020.11)
「故郷へ帰る…神戸、大好き街です」 栗原小巻 (上)
米田哲夫 (竹の台)

1973年10月に、市民や演劇関係者の運動も実って待望していた神戸文化ホール(大・中)が完成した。中ホールは客席は2階含めて900席で、2000席ほどの国際会館大ホールで芝居を観ていた私たちにとって芝居の楽しみ方も倍増し、観客と劇団によって様々な感動の舞台が創られていった。73年10月、飯沢匡作・演出「円空遁走曲」。いい文化ホールの幕開きにふさわしい円空を描いた作品。乞食円空を大滝秀治が演じ、滝沢修、宇野重吉、清水将夫、奈良岡朋子とこれまた、幕開きにふさわしい民藝総出演。大滝さんは「いい劇場だね」とつぶやき、客席からは「永い間、心待ちにしていた文化ホールでの公演がやっとの思いで観ることが出来、文化ホールのすばらしさが感じられた。宇野さん滝沢さんの大熱演に、私の中の生活のあわただしさが、一日で解放された様な自分でした。」の感想が寄せられた。

その文化ホール創立10周年の時に、小巻さんは1日館長で、わざわざ神戸をノーギャラで訪れてくれた。また、中ホール建て替えに際して小巻さんはこんなメッセージを寄せてくれてる。「文化の

香りが高い街、人々の心優しい街、神戸、大好きな街です。神戸演劇鑑賞会のお招きで、神戸を訪れるとき、故郷に帰る、そんな思いです。…」

「恋愛論」以降小巻さんの神戸の舞台は
1988年　シェクスピア作　千田是也演出「じゃじゃ馬ならし」 共演　小笠原良知
1991年　B・スレード作　加来英治演出「ロマンティック・コメディ」共演　伊藤孝雄
　　同年　　トルストイ作　千田是也演出「復活」 共演武正忠明
1992年　M・ゴーリキ作　千田是也演出「ワッサ・ジェレズノーア」 共演　河津左衛子
1997年　J・ゴールドマン作　ジョン・デビット演出「冬のライオン」 共演　池田勝
2000年　B・ブレヒト作　A・マーリン演出「肝っ玉おっ母とその息子たち」 小笠原良知
2009年　トルストイ作　加来英治演出「アンナ・カレーニナ」 共演　清水紘治
2013年　F・シラー作　加来英治演出「メアリ―・スチュアート」 共演　樫山文枝
2016年　加来英治作・演出「松井須磨子」
2019年　エディット・ピアフ原作　加来英治演出「愛の賛歌～ピアフ～」
（下につづく）

神戸の舞台に立った俳優たち（13）（2020.11）
「故郷へ帰る…神戸、大好き街です」　栗原小巻（下）
米田哲夫　（竹の台）

（上からつづく）

この期間、小巻さんにとって俳優として大きな出来事が起こっている。1994年、お師匠千田　是也の死去である。ご存じの方もおられると思いますが、千田さんは、あの関東大震災の際多くの　朝鮮人が殺され、その自戒の思いを込めて、「千駄ヶ谷のコリアン」から千田是也とペンネームし　た。また、日本の演劇・新劇史においてそのリーダー的役割は極めて大きく、俳優座という劇団の　指導者で、仲代達矢、加藤剛、田中邦衛、市原悦子たちの師匠でもあった。
二つ目は、50年過ごした俳優座を2013年に退団している。大きくは恩師の死があったと思われる。またより俳優として輝きたいと苦慮したうえでの結論ではと私なりに想像するが本人は語っていないのでわからない。とはいえ、俳優座を離れ、弟加来英治と手を組んでエイコーン企画を設立し、演劇の創造・企画に参画し、俳優としても劇団民芸の樫山文枝との共演など多彩で素晴らしい舞台づくりに新たに挑戦している。

さらに小巻さんは、神戸演劇鑑賞会の40周年記念パーティにも予告なく参加するなり、また、神戸での舞台終演後、疲れもあるにもかかわらず、私たち観客との「懇親会―居酒屋での飲み会」にも気軽に加わり膝を交えての交流をする舞台人であった。
個人的には、16年の「松井須磨子」は入院していたため、見ることができなかった。6年ぶりの文化ホールでの再開はとてもうれしかった。楽屋へ行き、再開を喜び合った。恩師を失い、劇団を止め、自ら企画して華ある俳優栗原小巻のさらなるこれからをあたたかく見守りたい。
次回からは、朝ドラ初期からの樫山文枝、日色ともゑ。亡くなった加藤剛、太地喜和子の舞台を紹介したい。

神戸の舞台に立った俳優たち（14）（2020.12）
清烈神戸に現れた加藤剛

米田哲夫　（竹の台）

やはり、「忍ぶ川」で小巻さんと共演した加藤剛の神戸での舞台を紹介する。私は親しみを込めて剛さんと呼んでる。その剛さんが亡くなってはや2年になる。
剛さんが神戸最後の舞台となったのは2016年6月。堀江安夫作、眞鍋卓嗣演出「先生のオリザニン」。俳優座70周年記念公演で、剛さんはビタミンを発見した鈴木梅太郎とその恩師古在吉直の二役を演じた。また、梅太郎の若き頃を、剛さんとそっくりの息子加藤頼が演じた。こんな感想がある。「感動！加藤剛か？梅太郎か？農芸化学者としての半世紀を通じて、繰り返される『人間の誤ち』に警鐘を、静かに心を込めて鳴らした」。「静かなお話の中に人への思いやりがあふれていてユーモアもあり、役者さんのすばらしさを感じました。剛さん、頼さん、凄い」。少し体調がすぐれなかった剛さんならではの久々の神戸公演、心にしみる舞台でした。

この舞台から2年後、剛さんは俳優座一筋の役者人生を閉じた。頼さんは、神戸公演の後、剛さんが亡くなるなんて夢にも思っていなかったが、インタビューで剛さんのことを語っています。「父は家でも稽古します…幼いころからその苦労見ています。…比較されることは当然だと、あえて俳優座を志望…梅太郎博士の故郷については父のエッセイから学びました」と父を語っている。
この時の会報に、剛さんは、「戦後70年にあたり『平和憲法は人類が到達した最高の英知であり、亡くなった人々の夢の形見』と語り『戦争を伝え、憲法を守ることは俳優の使命』と語っている。もう何年前だろうか、9条の会の運動が全国に広がっていった時、俳優座の有志たちが座の中に9条の会を設立した。俳優座劇場での港区9条の会との共催の「9条の集い」で、剛さんと隣り合わせて

集会に参加したことを思い出す。ただ黙って拍手して集会を見守っていた剛さん。私は俳優として人間として「平和憲法」を守る剛さんそのものに出合い肌感覚の勇気をもらった。

さて、剛さんは1961年に俳優座養成所10期生として卒業し、卒業後俳優座に入った。俳優座公演のいくつか神戸の舞台に立っていたが、私の目に清烈に現れたのは1971年2月、？・ゴーリキの「小市民」（増見利清演出）であった。この間、テレビでの五味川純平の「人間の条件」の梶、映画では松本清張の「砂の器」の和賀英良は忘れられない。また、剛さんを世間的に有名にしたのは、30年ほど続いたテレビ「大岡越前」であったが、私はほとんど見ていない。
1900年初頭のロシアは、金銭欲、名誉欲、嫉妬、エゴイズム、懐疑心、社会の変革に対する不安などの小市民性が満ち溢れていた。ゴーリキはそれを憎み、告発する。「働いている人間は、退屈なんかしない」と労働者賛歌をぶつ明朗な機関手ニールを登場させる戯曲が「小市民」。そのニールを当時の俳優座の旗手であった加藤剛が演じる舞台だ。剛さん演じるニールは清新で真摯で当時多くいた若い観客は大喝采でした。ちなみに私たちには懐かしい三島雅夫、井川比佐志が共演していた。
私たち神戸で、俳優加藤剛、人間加藤剛を最も感じさせてくれた舞台が、名作「―わが愛―シリーズ三部作」（作山本有三、夏目漱石）です。以下は次号にて紹介。

神戸の舞台に立った俳優たち（15）（2021. 1）
その愛三部作　俳優加藤剛　人間加藤剛
米田哲夫　（竹の台）

「小市民」以降、剛さんはシェクスピア劇で神戸の舞台に立った。1977年に仲代さんとの共演「ジュリアス・シーザー」（増見利清演出）。79年には「マクベス」（増見利清演出）に出演し、これらシェクスピアの後、3年後に近代に生きる苦悩する日本人に挑んだ。　82年、山本有三作「波―わが愛」（島田安行演出）。翌年には夏目漱石「門―わが愛」（島田安行演出）。さらに86年は、夏目漱石作「心―わが愛」（島田安行演出）で神戸の舞台に立った。「わが愛三部作」は、山本有三、夏目漱石の原作をもとにした優れた脚本を、島田安行がすべて演出して、俳優加藤剛の魅力を生み出し、多くの観客に静かな感動を与えてくれた。

「波―わが愛」は、人生を波に例えて、寄せては返す波にもまれながら、つつましやかに生きていく人間を描いた作品である。幕開きは大学生となった息子から夫のいる女性との結婚の話を相談されるところから始まる。大正初期の貧しさゆえに売られていく教え子との結婚などを通して、教師と生徒の愛、息子への愛を誠実に生きる主人公を加藤剛はまさに誠実に演じた。感想には「しみじ

みと心に奥にいきわたる」「思わず涙がでた」などとあり、新劇ならではのすがすがしい感動を与えた舞台であった。和服姿の加藤剛からにじみでる真摯な人生と役に向き合う演技に静かな拍手が沸いた。

明治43(1910)年、朝日新聞に連載された「門」は主人公宗助の生き方が中心だが、「夢千代日記」など日本の優れた脚本家早坂暁が劇化した。「門―わが愛」は漱石夫婦(袋正、阿部百合子)を語り手として登場させて、宗助・お米夫婦の愛の在り方に焦点をあてた舞台だった。早坂氏は「現代は性が氾濫している、心中するほどの愛を描きたい」と。姦通罪を背負った二人は、人目のつかない崖の下の粗末な借家で生活し、世間が認めない二人の愛―社会への抵抗を育てていく。感想には「索漠とした精神生活をしている私には…舞台を観ながら私の渇いた心に浄らかな涙が流れていった」「性や不倫の氾濫の中で、下家でひっそりと生きていく二人の愛は感動的です」。誠実に静かに生きようとする加藤剛、香野百合子の抑えた演技の誇り高いエロチシズムへと二人の演技に高い評価、そして俳優座が誇る共演者(袋、阿部のほか立花一男、児玉泰次、中寛三たち)がこの舞台の感動をさらに押し上げた。

最後の「こころ―わが愛」、これも大正3年に朝日新聞に連載された「こゝろ」を秦恒平が脚色し島田安行の演出。「私」という一人の男性が、先生のまじめな人生を知りたいとのぞんでいるときに先生からの手紙くる。そこには、親友Kとの女性をめぐる闘い、その女性を奪い取り、親友の自殺という告白の内容だった。明治人としての漱石が自己への誠実なこだわりを、女性をめぐっての友人への裏切りを描いた作品だった。感想には「現代人の感性に訴える心理状況がほしい」とやや難解さへの評価。「音楽がいい、舞台装置がいい」「加藤剛さんの演技に陶酔」といったものがあった。この作品も「門」同様に香野百合子、阿部百合子、立花一男、児玉泰次たちのアンサンブルも見事であった。

最後に剛さんのインタビューを紹介する。「漱石が好きだった」「漱石は時代よりも早く生まれたのですね」と漱石への思いやりが語られていた。そして「人間が世の中に対して真面目に生きる、人生を真面目にとらえる、当たり前のことだが―より平凡だが大切なことだと思う」と三作について語った。「わが愛シリーズ三部作」への剛さんの舞台や演じた役への誠実さは、まさに俳優・人間加藤剛を私たちに示してくれた。
年明けの「神戸の舞台に立った俳優」では、文学座太地喜和子さんを取り上げたい。

神戸の舞台に立った俳優たち（16）（2021. 2）

若くして逝った天性の俳優　　太地喜和子

米田哲夫　（竹の台）

なんと表現していいのかわからないが、あの自由奔放な明るい笑い、なんのてらいもない天性の振る舞い、太地喜和子は48歳の若さで亡くなった。俳優座養成所15期生で、同期に前田吟、村井国夫がいた。杉村春子を慕って文学座に1967年に入団している。神戸での初舞台は68年飯沢匡作・演出、喜劇「握手・握手・握手」である。その後、いくつか神戸の舞台（国際会館）に立っているが、先ず、私には忘れることが出来ない舞台があるのでそれを紹介したい。

73年1月水上勉作・脚色、木村光一演出「飢餓海峡」である（ポスター）。すでに65年、内田吐夢監督で三国連太郎、左幸子、伴淳三郎、高倉健出演で映画化され、名作と言われた（私は見ている）。ちなみに、私は個人的には松本清張の「点と線」「砂の器」、そしてこの「飢餓海峡」が三大推理小説とかってに決めている。
優れた映画の後、どう舞台化するか、作者水上勉自らが脚色、戯曲化し、木村光一の見事な演出で名作が出来上がった。漆黒に近い舞台に音楽が、やがて重なるように恐山の巫女の口寄せが聞こえてくる。日本国中が混乱と不安と希望が交錯してた昭和22年、津軽海峡を襲った台風により青函連絡船が沈没、北海道岩幌町がほとんど消失する火事、沈没死体より違った死体が打ち上げられるこうした背景の中で物語は始まる。

犯罪を犯した犬飼多吉（高橋悦史-映画では三国）は、娼家「花乃家」で杉戸八重（太地喜和子-左幸子）と出会い、八重から傷の手当など優しく気遣われて、奪った金のうちから大金を八重に与えて東北の地から去っていく。そして10年、戦後の社会中を生き抜いた八重と犬飼、その犬飼を追う弓坂刑事（金内喜久夫-伴淳三郎）、舞台は終幕へ。木村光一はその終幕に、舞台の照明を客席の私たちに仕向けた。この時の杉戸八重を演じた太地が素晴らしい。戦中、戦後の貧しさ、そんな中、幼くして娼家へ売りに出されても明るく自由に生きる八重を、天性の自由な振る舞いで演じた。舞台へのいっそうの感動を私たちに与えてくれた。

戦後という時代をどう私たちはイメージするか。日本国憲法発布、「下山」「三鷹」「松川」事件、2・1スト中止、東京裁判、朝鮮戦争、レッド・パージ等々、それぞれの人生での関りの中で様々な思いやイメージがあるだろう。私の「戦後」のイメージは、犯罪を犯してでも戦後をなんとしても生き抜こうとした犬飼や、娼婦でありながらも明るく優しく希望をもって生きた八重たちに代表される民

衆像が大きく浮かんでくる。それは、水上勉や木村光一、太地喜和子や伴淳三郎に三国連太郎たち俳優たちが作り出した芸術作品「飢餓海峡」という映画や演劇が、戦後史などの歴史書以上に、私に戦後像を感じさせてくれた。
いくつかの感想を紹介したい。
・戦争後の混乱期、娘を身売りせねば一家の生計が成り立たなかった貧困、その状況の中で一生懸命生きる八重、あの八重の姿は八重だけが持つものであろうか。
・戦争は人間の運命までも変えてしまう。俺には樽見を憎むことが出来ない。
・戦争の悲惨さがもたらす人間の裏面の中で八重の明るさが印象的で…終わったとき足がすくんで立ち上がれないくらいだった。
次号は、近代―明治、大正、昭和に生きた人々を描いた伊藤野枝(太地喜和子)たちの舞台を紹介。

神戸の舞台に立った俳優たち(17)(2021. 3)

舞台で日傘(パラソル)が似合う太地喜和子

米田哲夫　(竹の台)

嬉しいことに先月、日傘をさした太地喜和子の写真を編集者が選んでくれました。「飢餓海峡」での杉戸八重、そして今回紹介する「美しきものの伝説」の伊藤野枝も舞台でパラソルをさして登場した。
上手舞台から日傘をさしてゆっくりと周囲を見渡しながら歩く。さわやかさ、のどかさというか、先駆けて生きていく女性に一挙に引き込まれていく、表現したのが太地喜和子だった。

文学座「美しきものの伝説」宮本研作、木村光一演出
旧国際会館大ホール、のぼりが立ち、演歌師男女数人がヴァイオリンを弾き、歌いながらロビー、客席を流す。客席(民衆)とのつながりを求めた幕開き、驚きであった。舞台では、四分六(堺利彦)やクロポトキン(大杉栄)たちが幸徳秋水の大逆事件を語り合っている。そこへ、パラソルさした女、野枝(太地喜和子)が登場。明治から大正へその時代を生きていった堺利彦、荒畑寒村、大杉栄、平塚雷鳥、島村抱月、松井須磨子、沢村正二郎、中山晋平、小山内薫らが社会主義運動、女性解放運動、新劇運動と革命を、芸術を、そして民衆を語り合っていく。「カチューシャの歌」「枯れすすき」等を交えた歌、ロマン溢れる詩的なセリフ、美しく、厳しく、悲しい壮大な舞台であった。大正と時代を先駆けて生きていった彼らの中で、とりわけ、辻潤と別れ、大杉と結ばれ3人の子供を育てながら生きた伊藤野枝を、太地は明るく自由奔放に演じて、当時の若者私たちを引き付けた。感想にこんなのがある。「野枝の『好きなんです生活』『着物のすそをけとばし、けとばし』このことばが特に私の心に響いた。野枝の溌溂とした姿が羨ましかった」

宮本研には、戦後史四部作と言われる作品群があり、その後に「革命伝説四部作」を書いた。「明治の棺」（1973年青年座公演、観世栄夫演出）、「美しきものの伝説」「聖グレゴリーの殉教」（1972年文学座公演、木村光一演出、北村和夫主演）、「阿Q外伝」（1969年、文学座公演、木村光一演出、北村和夫主演）の4作品。特に、最初の作品「明治の棺」は渡良瀬川の鉱毒事件と田中正造を描くことによって明治をとらえようとした。棺の中の明治とはどんな時代であっただろうか。この作品があって、大正の「美しきものの伝説」へと引き継がれ、同時に中国の民衆が「阿Q」を見殺しにする「阿Q外伝」、ロシアの革命を描いた「聖グレゴリ―」と、歴史の中の民衆を描いた作品群だ。
「飢餓海峡」でも書いたが、歴史書を読んで歴史を学ぶのも大切だが、文学や演劇、映画から学ぶのは感性を交えての学びで、ぜひ、宮本研の「革命伝説四部作」をお薦めする。（米田へ連絡を）

さて、「美しきものの伝説」の終幕を紹介したい。
大正12年。大杉栄パリのメーデーで演説し逮捕、入獄。野枝、三男を生む。9月1日関東大震災。（この時二人は虐殺される）
尺八が流れ、野枝がパラソルをひらき、大杉にさしかける。枯れすすきが流れる中の鎮魂歌。
花咲かそ/花咲かそ/死ぬほど生きた人たちのために/花は咲いたか
花は咲いたか/花咲かそ/花咲かそ/未来に生きる人たちのため/花は咲いたか

最後に太地さんのインタビュ－から
「私と野枝さんが似ているところは活力的だということでしょうね。食べるのも、笑うのも、飲むのも、人を好きになるのも―タフなんですね。私子供たくさん生むだろうな」
太地さんは焼酎のウーロン茶割が大好きだった。よく笑いよく飲み、よくしゃべった。
残念ながら、お酒を俳優仲間と飲んで下田の海で亡くなった。48歳。太地喜和子の「女の一生」「欲望という名の電車」を見たかった。悔しいね。
他の神戸での舞台作。

1974年　「ドン・ジュアン」モリエール作　加藤新吉演出　共演　江守徹
1975年　「五番町夕霧楼」水上勉作　木村光一演出　共演　北村和夫
1983年　「新編・吾輩は猫である」宮本研作　戌井一郎演出　共演　北村和夫
1990年　「出雲の阿国」戌井一郎演出　共演　菅生隆之

神戸の舞台に立った俳優たち（18）（2021. 4）

舞台に劇団に演劇運動に命を燃やし続ける佐々木愛

米田哲夫　（竹の台）

西神ニュータウン9条の会の仲間から、新聞に連載されていた文化座・佐々木愛の記事の切り抜きをいただいた。太地喜和子が亡くなって30年、同い年の佐々木愛、これも何かの縁だろうか。ちなみに私も同い年の1943年生まれ。

佐々木愛を、愛ちゃんとも呼んでいるが、ここでは愛さん。神戸での舞台を書くとき、母鈴木光枝を抜きには出来ない。1963年に「埠頭」小幡欣治作、佐々木隆演出、鈴木光枝主演を観ているがほとんど覚えていない。それから13年の歳月が経つ1976年、文化座の財産「荷車の歌」上演。佐々木隆演出で主人公セキは鈴木光枝が演じ、この時、愛さんはセキの娘ツル代で神戸の舞台にはじめて立った。「荷車の歌」は明治・大正・昭和を生き抜いたセキという女性を通してこの近代、忍従を強いられながらも自らを大切にして生きた女の物語。名作だ。舞台のラストは、年老いたセキが荷車に乗せられ、孫たちにひかれて坂道を上がってくる。ここに時代が引き継がれていくこと、そして文化座という劇団も鈴木光枝から佐々木愛たちに変わっていくことが象徴されていたのである。

愛さんの舞台はそれ以降数多く私たち神戸の観客に感動を与えてきたが、その前にどうしても愛さんと神戸とのつながりを紹介したい。

コロナ禍の今年も、阪神淡路大震災の1月17日、シクラメンの花が神戸の鑑賞会に届けられた。少しづつあの震災が風化されつつある中で、26年間つづく愛さんからのメッセージだ。

愛さんとのつながりは、あの震災の日から数か月の4月に、震災後初めての舞台を観たときだった。文化座の「青春デンデケデケデケ」で、当時の海員会館での公演。果たして被災した人たちに楽しみを与えることができるだろうかとの劇団側の不安、まだ被災生活から抜け出せてない人たちが芝居を楽しめるだろうかとの私たちの心配をよそに、ロック、ギター、ブラスバンドなど文化祭にむけての高校生たちの青春謳歌の舞台は、被災した人々に大きな感動を広げた。終演後、愛さんの励ましの挨拶、そして劇場の狭いホールでの、芝居を、安否を、涙を交えての語り合い、そこは、生きる力が湧き上がる祭りのような光景だった。私はまさに演劇・芸術の原点をみた。

「荷車の歌」以降、文化座の神戸での舞台は

78年4月 「三婆」 有吉佐和子作　貝山武久演出　鈴木光枝、河村久子

78年12月 「サンダカン八番娼館」 山崎朋子作　鈴木光枝演出　鈴木光枝、佐々木愛

79年8月 「ある夜間中学の記録」 ふじたあさや作　貝山武久演出　鈴木光枝、佐々木愛

この70年代のころ、愛さんと職場の芝居を見る仲間と「焼き肉店」で親睦・交流会をした。

80年 「女と刀」 中村きい子作　鈴木光江演出　鈴木光枝、佐々木愛

81年 「あめゆきさんの歌」 山崎朋子作　鈴木光枝演出　鈴木光枝、加藤忠

82年 「啄木の妻」 渡辺喜恵子作　貝山武久演出　佐々木愛　佐々木雄二

83年4月 「土」 長塚節作　佐々木隆演出　丸山持久　佐々木愛

83年12月 「越後つついし親不知」 水上勉作　佐々木愛　関根孝彦

84年 「おりき」 三好十郎作　鈴木光枝演出　鈴木光枝　楠高宣

85年 「海の一座」 謝名元慶福作　八木貞男　佐々木愛　八木政男

87年 「びっくり箱　?・チスレット作　貝山武久演出　鈴木光枝　内田朝雄

88年8月 「三婆」 作演出は78年と同　鈴木光枝　河村久子

88年11月 「五番町夕霧桜」 水上勉作　木村光一演出　佐々木愛　津田二郎

90年 「荷車の歌」 山代巴作　鈴木光枝演出　佐々木愛　楠高宣

93年 「サンダカン八番娼館」 山崎朋子作　鈴木光枝演出　鈴木光枝　佐々木愛

と震災まで続く。

見てもらったらわかるように、全ての作品は、鈴木光枝、佐々木愛が演出、主演になっている。ここにこの劇団の特質がある。さらに、劇団は「土」「荷車の歌」「おりき」にみられるように「土のにおいが」する劇団の伝統を守りながら、「三婆」「サンダカン八番娼館」「海の一座」「越後つついし親不知」と喜劇、現代作家、そして沖縄を取り上げていき、次第に鈴木光江から愛さんへと劇団の創作姿勢は変わっていこうとしている。次回は、その流れの中で愛さんの舞台等を紹介したい。

神戸の舞台に立った俳優たち(19)（2021. 5）

さらなる演劇への未来をつないで ― 佐々木愛

米田哲夫　（竹の台）

愛さんとのつながりは多すぎて書ききれないが、いくつかに選びたい。

先ず、「サンダカン八番娼館」。二度観たが、93年は、舞台を通して鈴木光枝、佐々木愛の会話が聞こえてきそうな舞台であった。人間の住むとは言えないひどか家に泊りこんで、元からゆきさん(鈴木光枝)(唐人行・海外売春婦)を尋ねる女性記者(山崎朋子・佐々木愛)。極貧の生活から海外に売られていった悲惨なからゆきさんから、人間への愛や生きた時代を知り、心温まる感動を覚えた。私にとって忘れることのできない舞台となった。ちなみに私は震災後、天草が見える島原半島の南端のからゆきさんの記念館、口之津歴史民族資料館を訪れてからゆきさんを偲んだ。

70年に映画「沖縄」が上演された。武田敦監督、地井武男、佐々木愛主演の映像は、米施政下での映画創りの苦労も含めて沖縄の事実を知った。たぶんこの映画がきっかけになったのだろうと推

測するが、愛さんほど沖縄の舞台を創った演劇人はいないだろう。神戸では3本の舞台に立っている。
86年（本シリーズ「その18」では85年になっていた）に謝名元慶福作、八木貞男演出「海の一座」。サパニという小舟に乗って、美しい沖縄の島々を尋ね、歌や踊りで芝居を見せる一座の物語。そして、沖縄の過去の歴史が描かれていく。「群（ぶ）れ島よ、美（ちゅ）ら島沖縄（うちなー）は―。朝焼けの海へ、力強くくりだすサパニ」は感動的な幕切れだった。この謝名元慶福さんとのつながりは、その後、謝名元慶福作、佐々木愛語りの二つの??「いのちの森　高江」と「いのちの海　辺野古大浦湾」を描いた作品を私たちに見せてくれた。

2016年に「銀の滴　降る降るまわりに～首里1945～」杉浦久幸作、黒岩亮演出は、銃を持たない炊事兵を描いた作品。アイヌ、沖縄、日本の兵士たちが、敗戦まじか、偏見といがみ合って食い扶持を求めあう中で、力強く生き抜いていく兵士たちの物語。明るい区長夫婦と死を覚悟した兵士たちがサーターアンダギーを作っていく場面は、生きていく素晴らしさを、これからの沖縄に重ねさせてくれた感動の終幕だった。舞台ではこれら若い兵士たちの生き様を、明るく根強く触れ合っていくオバアを演じた愛さんは秀逸で、今の沖縄の戦いを支えているオバアを思わせてくれた。また、愛さんはこの役を演じながら、劇団の未来を作っていくそんな役割も感じさせてくれた。この作品は、愛さんが沖縄の「南北の塔」を訪れたことがきっかけで生まれたといわれている。

愛さん3本目は、今年8月、神戸で上演される杉浦久幸作、鵜山仁演出「命どう宝」。
銃剣とブルで土地を奪われた農民たちは、瀬長亀次郎も参加して座り込みで抵抗する。愛さんは「沖縄の人たちが見て、絶対大丈夫よ」と言われた。「日本の原点、今こそ見てほしい」「絶対的な力を持つ米軍に、『非暴力』による座り込み、平和への希望を見出したい」とも。
愛さんは「セガマサンバババア（うるさいばあさん）」と呼ばれ青年たちに慕われる役で登場。日本を代表する演出家鵜山仁が演出する。ぜひ、みなさん観てください。
愛さんは出演していないが、2003年に「若夏（うりずん）に帰らず―最後の学徒兵より―」堀江安夫作、佐々木雄二演出も神戸で上演した。

震災後、以下で神戸の舞台に立っている。
2000年　「故郷」 水上勉作　鈴木完一郎演出　鈴木光枝
2004年　「瞽女さ、きてくんない」 堀江安夫作　佐々木雄二演出　阿部敦子
2007年　「天国までの百マイル」 浅田次郎作　原田一樹演出　米山実
2018年　「三婆」 有吉佐和子原作　西川信廣演出　阿部敦子　愛さんにとっての作家水上勉との出会いは特別のものがあり特筆したいのだが、字数の関係でまたの機会にしたい。

どうしても最後に書きたいのは、私たちの鑑賞会の会員有志で作っている「お芝居大好き！9条の会～テアトル9」について。

2005年に誕生して「テアトル9ニュース」の発行や俳優座小山力也参加の「お郷ことばで憲法を」の朗読会や、9条のプラバン作成と配布等々、様々な活動をしている。2015年に愛さんを招いて「戦後70年、劇団の今、未来を語る」を開いた。ほぼノーギャラで駆けつけてくれた愛さん。122名が参加。劇団の誕生から現代まで、愛さんを中心に若い俳優との舞台づくりなど、私たちに文化・演劇の力と平和の大切さを語ってくれ大きな励ましをもらった。

神戸の舞台に立った俳優たち（20）（2021. 6）

日本の演劇・映画・テレビドラマを支えた名優たち―東野栄治郎

米田哲夫　（竹の台）

戦後の日本の映画、演劇、テレビドラマを支えた多くの名優（佐野浅夫、下条正己、中村梅之助、北村和夫、米倉斉加年たち）が神戸の舞台に立っている。
先ず、あの「水戸黄門」の黄門役の初代、2、3代の俳優を紹介したい。

初代の東野栄治郎は、1944年に千田是也、小沢栄太郎、東山千栄子らと俳優座の創立に参加している。私にとって東野栄治郎は水戸黄門より、浦山桐郎監督の「キューポラのある町」の石黒じゅんの吉永小百合の父親役が今でも印象的に残っている。一途で頑固な東野は、高度成長に移ろうとしている60年代の初頭、貧しくとも必死に生きる声と表情はまさに東野栄治郎だった。

1950年代から60年代へ、国際会館大ホールの舞台に数多く立っている。

1958年 「つづみの女」 田中澄江作　田中千禾夫演出
59年 「千鳥」 田中千禾夫作　千田是也演出　市原悦子
60年 「鳥には翼がない」 田中澄江作　田中千禾夫演出　川口敦子
62年 「ジュン琢亭の最後」 田中千禾夫作　千田是也演出　永井智雄
私はここからの舞台は見ている。
63年 「大姫島野理髪師」 田中千禾夫作・演出　河内桃子
65年 「日本の幽霊」 小山祐士作　阿部廣次演出　市原悦子　東山千栄子
66年 「ヒゲの生えた制服」 カルル・ツックマイヤー作　小沢栄太郎演出　三島雅夫
67年 「千鳥」 田中千禾夫作　千田是也演出　岸輝子
68年 「薔薇よりも孔雀だ」 小山祐士作　木村光一演出　杉村春子
69年 「自由少年－花の幻－」 田中千禾夫作　千田是也・増見利清演出　滝田裕介
70年 「冒険・藤堂作右衛門の」 田中千禾夫作・演出　栗原小巻
72年 「リヤ王」 シェクスピア作　千田是也演出　大塚道子。 以下、神戸文化ホールへ。
73年 「マリアの首－長崎を想う曲－」 田中千禾夫作・演出　加藤剛

74年 「検察官」 ゴーゴリ作　千田是也演出　松本克平
76年 「漂流野果て」 矢代静一作　島田安行演出　中谷一郎
77年 「夜の来訪者」 プリーストリー作　阿部廣次演出　松本克平
79年 「毒婦の父－高橋お伝－」 矢代静一作　島田安行演出　河内桃子

こうしてみてみると、「水戸黄門」に出演しながらほぼ毎年舞台に立ち、神戸に来ている。いくつか、私にとって印象深い作品を簡単に紹介したい。（先に仲代達矢で紹介した1964年の「ハムレット」にも出演している）
「日本の幽霊」は、戦前毒ガスを製造していた広島に近い瀬戸内海の島を舞台にしている。東京オリンピックが終わり高度成長へ突き進んで行こうとしている時代。毒ガスづくりの事実をはじめこの舞台は大きな衝撃をあたえた。東野さんは毒ガスの障害者を救う運動に参加していく町議を演じた。私にはこの時歌われた「ゆうれいゆうれいはなんでもかぎつける…」の市原悦子の声が今でも耳に残っている。またこの芝居は訪中公演され、出演者たちは周恩来と楽屋で交流している。
「薔薇よりも孔雀だ」は文学座公演の杉村春子主演の舞台だが、俳優座の東野栄治郎が出演している作品。文学座分裂の後、困難を極めていた文学座・杉村春子応援のために出演したといわれている。
主に田中千禾夫作品が多いが、東野さんはどの作品をとっても、きらびやかな大仰な演技ではないが、静かで確かなセリフで私たちを落ち着かせてくれる俳優で、私には滝沢修さんと同列なほど日本の演劇を引っ張ってきた俳優だと思っている。また共演者を見ても懐かしい名前、東山千栄子、三島雅夫、永井智雄、滝田祐介、中谷一郎たちが東野さんと競演して日本の映画、演劇を支えてきた。

さて、二代目西村晃は1954年に、劇団青俳を岡田英次、木村功らと設立。その翌年に神戸に来ている。「制服」安倍公房作、倉橋健演出の作品。58年には合同公演で村山知義作・演出の「国定忠治」に出演していて、これは西村の当たり役と言われている。しかし、二本とも私は見ていない。そして、1974年にいずみたく音楽の「ミュージカル　おれたちは天使じゃない」で前田美波里と共演している。私たちのインタビューに西村さんは、「我々の体の中には歌舞伎とロックが同居していると」戦争体験者がミュージカルに挑む意気込みを語っていた。以下次号へ。

神戸の舞台に立った俳優たち（21）（2021. 7）

新劇の名作を支えた名優―佐野浅夫、下條正巳

米田哲夫　（竹の台）

下條正巳、佐野浅夫の経歴はよく似ている。年齢は下條が10歳上だが、二人とも1954年の劇団民藝の創立に参加し、1971年にそろって退団をしている。
私が芝居を見始めたのが1962年で、二人が退団する71年、この間の10年、60年近くたっても心に残っている感動した舞台が数々あるが、その舞台に二人は立っている。それも主演ではなくほとんど脇役であったが、見事なアンサンブルを創り上げる名舞台であった。

先ず、テレビ三代目黄門役の佐野浅夫。私が広島への原爆への関心や戦後の歴史への関わり方に大きな衝撃を与えてくれた舞台から紹介したい。劇場は海員会館3階ホール（300人）。
1968年の「ゼロの記録」。東芝の職場演劇出身の大橋喜一原作で、民藝の将来を担う早川昭二が演出。一瞬にして廃墟となった広島。開業医小津（佐野浅夫）は負傷者にあふれた半壊状態の病院で、新爆弾は原子爆弾だと知る。そして敗戦。膨大な被爆者たちの治療に当たる医師たち。進駐してきた米占領軍はプレスコードをひき、原爆に関する一切の資料を没収。小津たちはこの広島の現実に医師として人間として向き合っていく。なぜアメリカは広島に原爆を落としたのか、ABCC 病院の役割、平和への詩人（峠三吉）の闘い・・・。いわば私にとっての広島の原点となる舞台であった。
真摯に原爆に向き合っていく一介の開業医を演じた佐野浅夫には忘れてはならない広島への痛恨があった。佐野は広島で被爆した移動劇団桜隊の一員だった。皮肉にも一枚の赤紙が佐野の命を救ったのだ。仲間の丸山貞夫、高山象一たちを失った佐野にとって、この舞台はかけがえのないものであった。伝えたいことは一杯あるが、珍しい文があるのでそれを紹介したい。「広島の医師たちが、たどった戦後史－それは人間の悲惨と人間の拝復を象徴しています。『ゼロの記録』は、ヒロシマが今日の日本人を支える根源的なモラル…」（東京都知事・美濃部達吉）。

日本映画最高の傑作「男はつらいよ」。1974年の14作目から最後となった1995年48作目までおいちゃんを演じた下條正巳。時には厳しく、しかし寅のおいちゃんとして父親らしく愛情もって接していたおいちゃんは「男はつらいよ」の名物であった。下條も多くの映画に出演しているが俳優としての基本は舞台であった。

日本の演劇史上の金字塔と言われている「火山灰地」。久保栄原作、村山知義演出、主演は雨宮を演じた滝沢修。しかし、宇野重吉はじめ、たぶんこの頃、映画はじめ数々の舞台に出演していた名優たちが出演している。清水将夫、芦田伸介、内藤武敏、信欣三、垂水五郎、細川ちか子、北林谷栄、奈良岡朋子、吉行和子、もちろん下條正巳、佐野浅夫。残念ながら私は見ていない。しかし、2005年、内山鶉演出の再々演は東京で観ている。
1967年これも私にとって忘れられない舞台「汚れた手」。間違ったとらえ方がされると困ると上演を許可しなかったと言われ、世界中が渇望されていたジャン・ポール・サルトルの作品を、宇野重吉が演出した。東ヨーロッパの仮想の国、戦争が終わる見通しのたった1943年の労働党内。書記のエドレル（滝沢修）を抹殺しようとしている青年革命家ユゴー（伊藤孝雄）。舞台は幕が上がって終幕になるまで、緊張感が途切れない舞台と客席（300人の海員会館のホール）。特に、背を向けているエドレルにピストルを向けるユゴー、息をすればその緊張が途切れるのでは思うほどであった。

芦田伸介、下元勉、佐々木すみ江、草間靖子、そしてエドレルの護衛を演じた下條正巳と佐野浅夫たちが舞台を創り上げる。舞台に幕が降りた後、表現できない感動に覆われた。一緒にみた友人と私は、大きな興奮と感動につつまれたまま、元町6丁目から元町駅まで言葉を忘れて歩きつづけた。この後も、み終わったあと感動のあまり言葉の出ない舞台と出会いは、再演の「夜明け前」（木村光一演出、加藤剛の青山半蔵）以外はない。

二人の神戸での舞台はおよそ下記の通りである。
1962年「アンネの日記」 訳・演出　菅原卓　牧理恵　信欣三　佐野浅夫
63年「狂気と天才」 サルトル作　村山知義演出　滝沢修　下條正巳
65年「開かれた処女地」 ミハイル・ショ―ロホフ作　宇野重吉演出　鈴木瑞穂　佐野浅夫
「コンベア野郎に夜はない」 大橋喜一作　宇野重吉演出　米倉斉加年　佐野浅夫　樫山文枝
66年「郡上野立百姓」 小林ひろし作　早川昭二演出　佐野浅夫　山内明
「セールスマンの死 」 アーサー・ミラー作　菅原卓演出　滝沢修　小夜福子　下條正巳
「オットーと呼ばれる日本人」 木下順二作　宇野重吉演出　滝沢修　下條正巳
67年「ヴイシーでの出来事」 アーサー・ミラー作　菅原卓演出　山内明　大滝秀治　佐野浅夫
「白い夜の宴」 木下順二作　宇野重吉演出　滝沢修　下條正巳　草薙幸二郎
68年「ワッサ・ジェレズノーア」 ゴーリキ―作　菅原卓演出　細川ちか子　下條正巳
「斬られの仙太」 三好十郎作　宇野重吉演出　鈴木智　樫山文枝　有馬稲子　佐野浅夫
69年「炎の人」 三好十郎作　宇野重吉演出　滝沢修　下條正巳　有馬稲子　宇野重吉
「かもめ」 チェーホフ作　宇野重吉演出　細川ちか子　樫山文枝　佐野浅夫
70年「もう一人の人」 飯沢匡作・演出　中村翫右衛門（前進座） 滝沢修　宇野重吉　下條正巳
「7月6日」 ミハイル・シャトロ－フ作　宇野重吉演出　滝沢修　垂水五郎　佐野浅夫
71年「神の代理人」 ロルフ・ホーホフート作　渡辺ひろ子演出　滝沢修　大滝秀治　下條正巳

次回は、有馬稲子、黒柳徹子の神戸での舞台を紹介したい。

神戸の舞台に立った俳優たち（22）（2021. 8）

有馬稲子と黒柳徹子

米田哲夫　（竹の台）

大女優のひとり―有馬稲子（宇野重吉のもとへ）

前回の舞台紹介で有馬稲子の名前が出ていた。何度か神戸に来ているが、最も気になったのが1968年、初演の舞台「想い出のチェーホフ」（作：エリ・マリ－ギュン、演出：宇野重吉）である。数多くある優れた宇野重吉の演出の中で、私は最高の作品であると思っている。芝居はチェーホフの手紙を中心に、チェーホフの戯曲を織り込んで、舞台装置はほとんどなくホリゾント（斜幕）を中心に照明と効果音のみで、俳優の手紙の朗読によって舞台は進行していく。6人しか登場しない俳優は、動きは殆どないなかで、文字通り力量が試される。チェーホフを演じた鈴木瑞穂は落ち着いたしっかりとしたセリフは素晴らしく、周りの奈良岡朋子、高田敏江らもこの舞台をいっそう盛り上げた。東京での公演では有馬稲子も出演していた。ただ、20代半ばの私でさえ、宝塚出身で、映画畑からの有馬稲子のセリフに他の俳優たちと違和感を感じたのを覚えている。71年の神戸での「想い出のチェーホフ」には有馬稲子は出演しなかった。

しかし、その後有馬稲子は、1985年地人会公演、リリアン・ヘルマン作　木村光一演出「噂の二人」共演南風洋子。1990年、地人会公演、W・インジ作　木村光一演出「帰れ　いとしのシーバ」共演近石真介。そして、2003年、地人会公演　水上勉作　木村光一演出「はなれ瞽女おりん」共演松山政路と、神戸の舞台に立った。生意気だが驚くような素晴らしい女優として登場した。おそらく私たちが想像する以上に彼女の女優としての苦闘があったのであろうと思われた。「はなれ瞽女おりん」の公演に際して「有馬稲子さんのお話を聞く会」も行われた。ガラガラの初演からカーテンコールで拍手が鳴りやまなかったエピソード、約1時間立ったままで、有馬さんの謙虚で凛とした女優魂を感じさせてくれた。ちなみに、1980年第15回紀伊国屋演劇賞を、「噂の二人」と「はなれ瞽女おりん」で有馬さんは受賞している。また、神戸公演は600回目の公演となった。

喜劇で拍手の鳴りやまなかった舞台―黒柳徹子

1990年、劇団 NLT 博品館提携公演「ニノチカ」（？・レンゲル作、飯沢匡演出）で黒柳徹子が神戸の舞台に立った。ソビエトに忠誠を誓う女検察官ニノチカ（黒柳徹子）は特命を帯びて花のパリへ。崇高な使命のニノチカがパリの弁護士と恋に陥り、さてニノチカの使命は？モスクワとパリの価値観の違い…を飯沢匡が見事に風刺と批判で喜劇を作り上げた舞台。そのニノチカを彼女特有のセリフ回しでその魅力を舞台に繰り広げた。なりやまない拍手は今も耳の残っている。

ちなみに、演出した飯沢匡は日本の演劇界で喜劇の道を切り開いた人であった。NHK の「ヤン坊ニン坊トン坊」のオーデションで黒柳の才能を見出し、女優への道へ導いたのが飯沢匡だった。

さて次に、本HPの先月号に掲載された二人の随筆に関係して、少しだけ舞台を紹介したい。
勿忘草さんの「むかし内国閲覧会」
書かれている1903年の人類館事件のことである。この事件を1976年に沖縄の作家知念正真が「人類館」と題して戯曲化、2008年青年座が「人類館」として上演した。場所は東京・青年座の狭い稽古場で、沖縄出身の津嘉山正種が一人芝居で、しかもウチナーグチ（沖縄の方言）で勿忘草の書かれた通り事件を演じた。津嘉山正種の素晴らしい声、それを沖縄の言葉で、見る者には言葉はわからなくとも彼の怒りや悲しみを含んだ語りは、せまい劇場空間で私は大きな衝撃を受けた。忘れることのできない芝居となっている。

ヒストリアンさんの「平和学習の島　大久野島」
山本優先生のお話の時に紹介しようと思っていたが、ヒストリアンサンが書かれたので、その芝居再び紹介したい。すでに、「その20」の東野栄治郎のところで紹介しているが・・・
抒情作家と呼ばれている小山裕士は、美しい瀬戸内海を背景に原爆を静かに書き続けている（「泰山木の木下で」北林谷栄の代表作、1963年神戸で公演）。「日本の幽霊」1965年に神戸公演。大久野島を花之島と置きえて、毒ガスの恐ろしさと戦後の日本を書き上げている。作者は当時から化学兵器、核兵器の使用禁止を訴えていた作品で、前にも書いたが、国交回復前の中国でも公演されている。市原悦子が歌った幽霊の歌。
「ゆうれいゆうれい　ゆうれいの願いはひとつ　ゆうれいゆうれい　ゆうれいの願いは平和」

次回は、緒形拳、中村梅之助たちの舞台を紹介したい。

神戸の舞台に立った俳優 その23（2021. 9）
「一本刀土俵入り」の中村梅之助
米田哲夫（竹の台）

梅之助は前進座の創立者の一人中村翫右衛門の息子である。前進座は、1931年満州事変が勃発した年に、大部屋の下級俳優を中心に誕生した。演目は市井の庶民・江戸っ子などリアルな世話物を中心に、歌舞伎、時代劇、児童劇を上演し、旧来の歌舞伎にはない女性が演じる舞台を創っていった。
創立時「本劇団は、その収入によって座員の生活を保障しつつ、広範な民衆の進歩的要求に適合する演劇の創造に努力する」「総会を最高の決議機関として全座員によって構成する」と民主的劇団創造と運営を掲げた。いわば今日も通用する劇団運営だ。
戦後1948年ごろから全国津々浦々にシェクスピア劇などで巡演をした。この公演は、全国に演

劇鑑賞団体（勤労者演劇鑑賞会）が誕生していく大きなきっかけにもなっていた。
パンデミック下の昨年8月に「牡丹灯籠」で神戸に来ているが、66年前の1954年に「動員挿話」「奥州白石噺」等で神戸で上演している。
中村翫右衛門は1958年に「番町皿屋敷」（岡本綺堂作）で舞台に立ち、その後、幾度から来演しているが、特筆すべきは1970年に飯沢匡作：演出による民藝公演「もう一人のヒト」だ。終戦まじか天皇の責任が問われそうな頃を舞台にしていて、滝沢修が皇族を演じ、狂信的な天皇主義者を翫右衛門、そして”もう一人のひと”を宇野重吉。 前進座、新劇の3人の名優の共演。喜劇を通して天皇制を問いかけてくる名舞台。飯沢匡は「権力者は喜劇の持つ恐ろしさを知ってこれを育てないようにしてきた。だから私は喜劇を書き続ける」と笑いで鋭い問いかけを投じている。
さて、梅之助は1986年に「一本刀土俵入り」（長谷川伸作、平田兼三演出）が特筆の舞台だ。
宿場町でお蔦に受けた”情け”に、恩を返したくて博徒と戦う茂兵衛。多くの日本人が浸った人情噺を長谷川伸が書き上げ、その茂兵衛を演じた梅之助。そしてお蔦を演じた国太郎。前進座という伝統の中で培われた梅之助は、その柔らかい声と併せてアンサンブルに恵まれた前進座の舞台は、私たち観客にしっとりと落ち着いた感動を与えてくれた。いうまでもなく国太郎のお蔦は素晴らしかった。

「王将」名優 緒形拳
生涯を前進座で生きた梅之助と違って緒形拳は、1917年澤田正二郎らによって創立した新国劇を、島田正吾、辰巳柳太郎らの後継者と言われながら1968年に退団している。そして映画、テレビ、舞台と日本を代表する俳優となった。
神戸での舞台には、あの「写楽考」で西田敏行を見出した金井影久は、1973年「北斎漫画」（金井プロ制作、矢代静一作、栗山昌良演出）で緒形拳を新劇の舞台に載せた。すでにテレビや映画で評価を得ている緒形は、共演した渡辺美佐子、観世栄夫、久世龍之介、小沢栄太郎たちと圧巻のドラマを創った。作者の矢代静一は、「北斎漫画」の漫画はスケッチであると言っている。スケッチでありながら北斎を巡ってのドラマ、その人間像は充実感あふれる舞台として私たちを圧倒した。私たちのインタビューに応じた緒形「北斎は一生に何度もぶつからない、いい台本だ」と答えている。
次は1976年「悲しき恋泥棒」（金井プロ制作、矢代静一、栗山昌良演出）
そして1977年には北条秀司作の「王将」（金井プロ制作。栗山昌良演出）
「王将」をやりたくて役者になった緒形拳。北海道から九州へ、6か月の旅は神戸が打ち上げとなった。「人生の中で二度とこんな経験があるとは思えない」と打ち込んだ坂田三吉。リアルでシリアスな舞台に親しんだ私たちに「王将」の緒形を舞台、役者、人情に芝居の醍醐味を味わった。

声優のはしり、あの独特の声 熊倉一雄
1972年の「道元の冒険」（井上ひさし作、熊倉一雄演出）。1973年「11ぴきのねこ」（井上ひさし作、熊倉一雄演出）いずれもテアトル・エコー公演で熊倉一雄主演。歴史や人間に向き合うリアルな舞台を観てきた私たちにとってこの二つの作品は、歌に踊り、スピーディーでリズミカルは衝撃的でした。しかも、井上ひさしとのはじめての出会いであった。

次回は、たぶん伊東さんの最後の編集になるのでは？「神戸の舞台に立った俳優」の最後に書こうとしていた滝沢修、宇野重吉の舞台とエピソードを載せます。

神戸の舞台に立った俳優たち 24（2021. 10）

滝沢修と宇野重吉 文化ホールの客席に座っていた滝沢修

米田哲夫（竹の台）

伊東さん長い間ご苦労様でした。伊東さんらが積み上げた西神ニュータウン9条の会のホームページが今月より新しい人たちに引き継がれました。伊東さんの仕事がそうさせたのでしょうが、新しい若い人たちに継承されていく、これもわが「会」の優れた特徴でしょう。今日の様々な市民運動や文化運動には、仲間内での運動から抜け出せず、若い人に継承されない弱点がありますが、わが「会」は運動もそれをすすめる人たちも新陳代謝の努力が行われています。その転換期に、私はこのシリーズの最後に書こうと思っていた日本を代表する名優、滝沢修と宇野重吉、二人の演劇家としてのつながりを書いてみます。

その日は、1987年8月7日。宇野重吉一座公演、木下順二作、宇野重吉演出「おんにょろ盛衰記」「三年寝太郎」の客席に、滝沢修が中ホール客席の真ん中の通路を前にした席に座って、宇野重吉の舞台を観ていた。たまたま、私はその隣に座っていた。「三年寝太郎」が始まると滝沢修はゆったりとした笑顔で舞台を見入っていた。そこには青山半蔵やウイリー・ローマンそしてゴッホの顔からは全く想像できない優しい笑顔であった。安堵、不安、信頼、連帯、同志あらゆるものが笑顔に含まれているように感じられた。たぶん、寝太郎を演じていた宇野重吉からも客席真ん中の滝沢修の表情は見えていたであろう。

「旅回り宇野重吉一座」は1986年9月6日茨木県竜ケ崎文化会館から始まった。大きな幟をたて、三平号というトラックに大道具と俳優たちの私物を積み込んだ旅公

演だった。第一次巡業は高萩―横浜―町田―厚木―栃木から岡山、広島、四国、兵庫、大阪と20の市町村を回った。
宇野重吉は「そう思いはじめてからもう10年以上にもなろうか。少人数で一座を組んで、町から村へ、村から町へ旅芝居をして歩く―。いきいきした観客の目玉、ため息、笑い、そして四季ごとに変わる舞台周りの趣。役者たちは澄んだ空気の中でのびのびと大声を張り上げる―。いまでは狂気沙汰の大都会の「文化・芸術」の中で、ぶつぶつ言いながら「新劇」をやりつづけるのも、あんまり能がなさすぎる。むかしこんな歌があった。『朝はふたたびここにあり、野に出でよ、野に出でよ、稲の穂は黄にみのりたり』」と述べている。

一座と言っても「おんにょろ盛衰記」には俳優里井正美、米倉斉加年、日色ともゑら12人、「三年寝太郎」には俳優宇野重吉、小夜福子ら14人、さらに演出部11人他を含めての大所帯だ。そして第二次、第三次、第四次、第五次と1987年10月10日沖縄県浦添市市民会館公演まで、115の町、村を巡業している(「旅回り宇野重吉一座」岩波書店・日色ともゑ「じゃがいも父さん－宇野重吉一座－最後の旅日記」小学館文庫、文芸春秋社)。
神戸での公演は第四次巡業の最後の公演であった。その公演になぜ滝沢修が神戸に来たのであろうか。この1987年3月26日に宇野重吉は肺癌の手術をしている。術後、6月には一座の稽古が始まり、大阪からの巡業が始まった。手術後も公演に参加して寝太郎を演じ続けた宇野重吉の舞台を、たぶん「最後」と思って滝沢は神戸に来たと思われる(先の日色ともゑさんの「じゃがいも父さん－」にも滝沢さんがわざわざ神戸まで観に来たと記されている)。

宇野重吉はその年の12月に再入院し、翌年1月9日に亡くなっている。73歳だった。
滝沢修は1906(明治39)年に生まれ、宇野より8歳年上。1924年に築地小劇場の研究生になり、1934年に村山友義らと新協劇団を結成して島崎藤村作の「夜明け前」で青山半蔵を演じている。この時宇野も出演している。その後、久保栄の「火山灰地」でも二人出演している。こうして滝沢・宇野は、弾圧が強まる中、「夜明け前」「火山灰地」等の舞台づくりを行ってリアリズム演劇の発展に寄与した。敗戦後、1947年に民衆芸術劇場の創立に二人は参加し、その後、発展的解消をして久保栄、菅原卓らと「劇団民芸」を作った。創立理念は「リアリズム演劇の確立」で、戦前の「夜明け前」「火山灰地」を発展的継承する上演を行った。宇野は岡倉士郎が亡くなった後、演出も手がけるようになり、1960年には「イルクーツク物語」62年に木下順二の「オットーと呼ばれる日本人」を演出し、その後、滝沢出演、宇野演出の名作が数々生まれていく。

次回は二人が作った名作を紹介し、震災の際に滝沢修が神戸の街を歩いたことを記したい。

神戸の舞台に立った俳優 26（2021. 11）

宇野重吉の秘蔵っ子―樫山文枝、日色ともゑ、米倉斉加年

米田哲夫（竹の台）

滝沢修、宇野重吉の数ある名作を整理するには、まだまだ時間がかかりそうなので、その前に宇野重吉の秘蔵っ子たちの舞台を紹介する。

樫山文枝

年配の人たちはよくご承知、樫山文枝は1966年の「おはなはん」で、日色ともゑは67年の「旅路」で日本中をわかした女優だった。舞台女優がマスコミで売れっ子になると劇団を離れて映画、テレビ界へ入っていく人が多い中で、同い年の二人は今日まで、劇団民藝で舞台に立ち続けている。そこには、宇野重吉に学んだ舞台の魅力、女優としての楽しさ、そして観客との熱いつながりがそうさせているのだろうと推察している。二人とも、民藝で女優の登竜門と言われている「アンネの日記」でアンネ役を演じている。

樫山文枝は2017年「集金旅行」で神戸の舞台に立った。井伏鱒二の連載小説を舞台化（吉永仁郎脚色）したもので、いわば借金を取り返しに樫山が西川明とともに九州、中国地方旅する物語。女優を不動のものとしつつある中で樫山がコメデイを新たに演じた。静かな喜劇で、大変好評であった。

樫山の神戸での初舞台は定かではないが私の記憶では68年のシェクスピアの「ヴェニスの商人」（浅利慶太演出、滝沢修シャイロック）のポーシャ役ではなかろうか。その後、神戸では数々の舞台に立っている。1980、81年の「夜明け前」（一部、二部）では青山半蔵（鈴木智）の妻お民を演じている。ちなみに昨年12月亡くなった夫綿引勝彦、綿引も民藝の俳優であった。

日色ともゑ

日色ともゑは2014年に「八月の鯨」（デヴィッド・ペリー作、丹野郁弓訳・演出）で神戸に来た。

1950年代のアメリカ、8月になると鯨が現れるのを楽しみにしている老姉妹。姉を奈良岡朋子、妹を日色ともゑ。姉妹が老に抗し、もがきながらときめきを求めて生きていこうとするのを二人の名優が見事に演じた。高齢者が多い観客は「私の人生終わっちゃいない」というセリフに感動していた。ときめくロシア男性に篠田三郎が客演。終演後、日色さんは私たちのインタビューに答えて「宇野先生との出会いがあって…いつのまにか50年」と感慨深く宇野重吉を偲ばれた。前回紹介したが、「じゃがいも父さん旅日記―宇野重吉旅日記」（小学館文庫）を出している。

13年、演劇鑑賞会の会員で作っている「お芝居大好き！9条の会」で企画した「日色ともゑ―お芝居と平和を語る」には快く神戸に来てくれた。130名もの参加があり、詩の朗読にも感動した。
二人が出演した数多くある舞台の中で最近の舞台のみ紹介したい。
2011年「海霧」原田康子作 丹野郁弓演出 樫山文枝 伊藤孝雄
2016年「明石原人―ある夫婦の物語」小幡欣治作 丹野郁弓演出 日色ともゑ 千葉茂則
二人はこうした舞台の終演後、私たちとの交流を兼ねた懇親会には、いつも気軽に参加してくれた。

米倉斉加年

米倉斉加年は、俳優としても演出家としても私には忘れることができない舞台人だ。最初の出会いは、1965年「コンベア野郎に夜はない」大橋喜一作 宇野重吉演出 共演は佐野浅夫だ。
区役所に「合理化」のため、はじめて窓口にコンベヤシステム(流れ作業)が導入されようとした時のタイミングのいい舞台で、職場ではたくさんの若者が芝居を観た。
私が働く、その感性で芝居を観ることを大事にしたのはこの舞台が大きなきっかけであった。
1966年「私のかわいそうなマラート」アルブーゾフ作 若杉光夫演出。
1942年のレニングラードはドイツナチスの包囲網にあった。壊れた建物の中、3人の少年少女が出合う。マラート(米倉斉加年)は橋を架ける技師に、少女リイカ(草間靖子)は医師に、もう一人の少年レオニ―ジク(伊藤孝雄)は詩人になりたいと夢を語る。そして戦争が終わり、1959年3人は出合う。愛と友情そして時代をどう生きていくか、映画畑出身の若杉光夫のみずみずしい演出もあって、22歳の私にとって詩情豊かなロマンあふれる舞台であった。「人生は死ぬ一日前にやり直すことが出来る」というセリフは今も胸に焼き付いている。そして、衝撃的な舞台、米倉演出、主演の1977年「燕よ、お前はなぜ来ないのか」、1982年「朝を見ることなく」を紹介するが、次回にまわしたい。遅くなってしまったが、北林谷栄の舞台も紹介したい。

神戸の舞台に立った俳優 26（2021. 12）

演出もてがけた米倉斉加年、日本一のおばあちゃん女優北林谷栄

米田哲夫（竹の台）

米倉斉加年

1934年福岡で生まれ、宇野重吉に誘われ民藝に入団。前号で「コンベア野郎に夜はない」「私のかわいそうなマラート」を紹介しているが、演出も行い精力的な演劇活動は続けられた。

1977年に大橋喜一作の「燕よお前はなぜ来ないのか」―T・K 生「韓国からの通信」（雑誌「世界」掲載）が米倉の演出で上演されている。「韓国からの通信」には、朴ファッショ政権下化、韓国と「世界」の全くのトップ・シークレットで韓国から送られてくるT・K生の手記が「世界」に載せられていた。それをもとに金芝河の詩など加えて大橋喜一が米倉と相談しながら書き上げた戯曲＝叙事詩である。戯曲は舞台に載ればそれは俳優たちの手の中にあったが、この芝居は演ずるのでなく報告者として舞台に立つ事が求められていた。そして画家米倉の手にかかり、抑圧された韓国の民衆の声が客席に届くのであった。大橋は基礎となった自らの台本が上演と共に変化していった舞台をもう一度書き直した上演台本を作っている。この芝居を上演するにあたって韓国のある団体から上演中止の圧力がかかった。勿論、劇団と一緒にそれをはねのけての上演であった。文化ホールの客席はいわば韓国のような緊迫した状況で舞台は圧倒的な大きな感動に包まれた。終幕は金芝河の「日本人、日本の民衆にあてたアピール」で終わった。ちなみに、燕は韓国では春を告げる鳥だといわれている。また、米倉は、1976年に「魔法教えます」、1977年に「多毛留」で2年続けてボローニャ国際児童図書展グラフィック大賞を受賞している。

1982年に「朝を見ることなく」徐兄弟の母呉己順さんの生涯を描いている。脚本は李恢成・大橋喜一で演出は米倉斉加年。5歳で日本に来た呉己順は在日朝鮮人として、徐兄弟ら5人の子供を育てた。1971年ソウル大学留学中に「学園浸透スパイ団事件」で徐勝、徐俊植兄弟が逮捕される。厳しい拷問を受けながら無実を訴え続ける兄弟を、10年間に60回以上も日韓を往復して息子を励まし続けた呉己順を描いた実話をもとにした舞台。

米倉も徐勝に出演した。呉己順を演じたのが北林谷栄。朗読者で宇野重吉も出演している。徐勝は、後に立命館大学の特命教授につかれ、私は大学の平和ミュージアムでガイドをしていたころお会いし、顔には獄中での傷が残っていたが、獄中のことなどをお話しした。

米倉斉加年の主だった作品は

1983年　吉永仁郎作　渡辺浩子演出「新編・大正さすらい人」　米倉斉加年　奈良岡朋子

1990年　ハワード・ジン作　米倉斉加年演出「エマ―自由よ、アメリカに咲いた赤い花―」
　　米倉斉加年　樫山文枝

1992年　シェイクスピア作　米倉斉加年演出「リヤ王」米倉斉加年　斎藤美和

1995年　小幡欣治作　観世栄夫演出「熊楠の家」米倉斉加年

＊震災時の劇団の協力作品

北林谷栄

「日本一のおばあちゃん女優」と言われた北林谷栄。戦前から宇野重吉と演劇サークルを行い、劇団民芸の立ち上げにも参加した。30代の若い時に、宇野に言われておばあちゃん役を演じており、以降映画に舞台に素晴らしいおばあちゃんを演じた。

神戸では1962年の「オットーと呼ばれる日本人」でスメドレーがモデルと言われている宋夫人で滝沢修と舞台

に立っている。北林の代表作は、1963年、演劇史上でも名作と言われている小山祐士作 宇野重吉演出「泰山木の木の下で」。当時、私は19歳で舞台は殆ど覚えていないが、幸いなことに1991年に再演されている。三度も原爆の被害を受け、広島の劇作家は終生、瀬戸内海を愛しながら広島を描き続けた。瀬戸内海に浮かぶ小さな島、みごとな泰山木が匂っている。神部ハナは9人の子供を産み、原爆で家族を亡くして、静かに暮らしていた。そんなハナを見事に演じた北林はこの後、「日本一のおばあちゃん女優」になっていく。数々の神戸での舞台の中で、1993年「粉本楢山節考」は北林が本を書き、米倉が演出し北林が老婆を演じたのは神戸では絶賛だった。
ちなみに映画「阿弥陀堂だより」(南木佳士作 監督小泉堯史)は、90歳を超えた北林が、舞台に立たない宇野重吉の息子寺尾聡と「これが最後となるかもしれない」と共演を希望して出演したといわれている。

神戸の舞台に立った俳優 27（2022. 1）

滝沢修

米田哲夫（竹の台）

師走の12月16日、神戸文化ホールで仲代達矢主演の無名塾公演松本清張作「左の腕」を観た。89歳とは思えない声の張り、時代物のしぐさや振る舞いは見事で、さすが仲代達矢を感じさせた。
また舞台装置や音楽(池辺晋一郎)が舞台成果をいっそう盛り上げ、客席から立ち上がるほどの拍手と感動にあふれていた。
さて仲代が追い続けていた滝沢修はすでに戦前の舞台を少し紹介した。侵略戦争へひた走り、自由と民主主義を抑圧してきた1930年代に、滝沢・宇野が所属していた新協劇団が、久保栄演出「夜明け前(一部・二部)」、「火山灰地(一部・二部)」を上演した。滝沢はそれぞれ主人公青山半蔵、雨宮聡を演じ、宇野も出演した。明治という時代への矛盾から生き悩みそして自死していく青山半蔵、侵略戦争とファシズムにひた走る時代に北海道農業技術を通してこの国の近代の相克に生きた雨宮聡。この二人を弾圧と検閲の時代に歴史に向き合う人間の有り様としてリアリズムで描いた舞台は戦前の最高の作品(劇作・演出・演技・舞台形象)と言われた。そして戦後、60年安保の後に、この二つの作品を再演した滝沢と宇野たちの功績は、戦後の日本演劇(そこには鑑賞運動も含んで)に大きな足跡を印した。

主な滝沢修作品

1962年、66年に木下順二作、宇野重吉演出「オットーと呼ばれる日本人」細川ちか子
62、72、87年 アーサー・ミラー作、菅原卓演出「るつぼ」細川ちか子
63年 サルトル作、鈴木力衛演出「狂気と天才」
64年 木下順二作、宇野重吉演出「冬の時代」鈴木瑞穂。67年「白い夜の宴」伊藤孝雄。
66、75、84年 アーサー・ミラー作、菅原卓演出「セールスマンの死」

68年 シェイクスピア作、浅利慶太演出「ヴェニスの商人」芦田伸介
68年 サルトル作、宇野重吉演出「汚れた手」伊藤孝雄
69、77、90年 三好十郎作、村山知義演出「炎の人－ゴッホ小伝－」清水将夫
70年 飯沢匡作、演出「もう一人のヒト」宇野重吉、中村勘右衛門
70年 ミハイル・シャトローフ作、宇野重吉演出「七月六日」清水将夫
72年 松本清張作、村山知義演出「日本改造法案―北一輝の死―」清水将夫
73年 クライスト作、宇野重吉演出「こわれがめ」鈴木智
74年 チェーホフ作、宇野重吉演出「桜の園」真野響子
74年 オストロフスキー作、岡田嘉子演出「才能とパトロン」伊藤孝雄
75年 武者小路実篤作 滝沢修演出「その妹」小沢弘治
89年 サマセット・モーム作 若杉光夫演出「雨」樫山文枝
90年 ゴーリキー作、渡辺浩子演出「どん底」岩下浩
シェイクスピア、チェーホフはじめソ連から帰ってきた岡田嘉子の演出であったり、浅利慶太の演出も受けるなど様々な作品に出演しているが、注目されるのは木下順二の作品である。
木下、宇野、滝沢の三人の舞台作りの総決算は「子午線の祭り」である。
さて、宇野重吉は、滝沢、木下以外では、初演出で大きな評価を得た60年のアルブーゾフ作「イルクーツク物語」奈良岡朋子、山内明たち出演のである。ギリシャ悲劇のコーラス隊を参考にした愛と労働の作品は当時の若者たちに大きな感動を与えた。
小山祐士作品 63年「泰山木の木の下」北林谷栄
大橋喜一作品 64年「消えた人」信欣三。65年「コンベヤ野郎に夜はない」米倉斉加年。
71年「銀河鉄道の恋人たち」下元勉
ソ連の作家の作品
63年 ヴエローゾフ作「初恋」小夜福子。
65年、P・ジョーミン作「開かれた処女地」垂水悟郎
71年 マリュウギン作「想い出のチェーホフ」鈴木瑞穂、ガーリン作「こんな筈では…」
小夜福子
68年、三好十郎作「斬られの仙太」樫山文枝
チェーホフ作品
72年「三人姉妹」森雅之、74年「桜の園」奈良岡朋子
75年 野上弥生子作、「迷路」奈良岡朋子
83年 清水邦夫作「エレジー－父の夢は舞う－」南風洋子～この時初めて音楽に息子寺尾聡を使う。

そして87年の旅廻りの「三年寝太郎」「おんにょろ盛衰記」へと続くのであるが、ここで「旅廻り 宇野重吉一座」(岩波書店)より木下順二の追悼の文章を紹介したい。
「宇野重吉は、演劇生活の第一歩を始めた時から“普及と向上”の論理を持っていた。“旅廻り”でその初志を貫いた。芝居の原点へ立ち返ることを考えはじめ…その実践の道を走り

始めたときに彼は倒れた。…“旅廻り”を最後は沖縄まで行き、三越劇場の舞台を、死の16日前まで踏んでいた。…宇野重吉は酒盛りの向こうから私の顔を見ながら、いつものあの何とも言えない人なつこい顔で笑った。」
滝沢修は阪神淡路大震災の1995年、89歳の時に神戸の街を歩いていた。その時の車の運転をした田中さんの感想文を紹介します。

神戸の震災と滝沢修さん

阪神淡路大震災からの3か月後の4月10日、神戸の文化団体でつくる「神戸をほんまの文化の町にする会」主催で「わ・わ・わフェスティバル」がシーガルホールで開催されました。その時のゲストが劇団民藝の滝沢修さん（講演）、南風洋子（朗読）でした。
その後、滝沢さんが神戸の街を見たいという話になり、翌日委員長の米田さんと事務局員だった私がマイカーで案内することになりました。滝沢さんを乗せての運転は緊張しましたが、幸い、当時は車も少なく安全運転で出発しました。
26年たった今でも残っているのは、火事で焼け野原となった長田の街、建物など何もない跡地に車を降り、周りを眺めながら「戦争の時と同じ風景だ」としみじみと言われた言葉です。その後、瓦礫の町を東灘まで走り、昼食をして新神戸まで送りました。付き人として一緒に同乗されていた俳優の内田喜三男さんと劇団の話をされていて、特に宇野重吉さんのお話をされている時は「重ちゃんはね～」とお二人の信頼関係を強く感じました。滝沢さんの優しい声は今も耳に残っています。　　田中千津子

いよいよ神戸の舞台に立った俳優たちも残り少なくなってきた。来月は大滝秀治などを紹介したい。

神戸の舞台に立った俳優 28（2022. 3）
ハムレットとパンデミック
米田哲夫（竹の台）

正月明けに、平田オリザ作・演出の「15少年・少女漂流記」を、豊岡まで観に行った。たじま児童劇団、旗揚げ公演。中・高校生出演の舞台だったが、演技もセリフも含めて満席の観客を楽しませてくれた（つながり1月号”たけし”原稿。神戸新聞1月26日の声欄参照）。
「16世紀のヨーロッパのパンデミック－ペストの恐怖は、やがてイタリアを中心にルネサンスを迎え、文化的復興を遂げる」「ペスト以前と以降を比較すれば、ヨーロッパ社会は、まったく異なった社会へと変貌し、変貌した社会は、強力な主権国家を形成する」（世界20年7月号「パンデミック後の未来を選択する」長崎大学山本太郎）そのルネサンス期のシェクスピ

アは多くの戯曲を書いた。それは全て人間賛歌のドラマであって、だからこそ400年たった今でも世界中で上演されている。「なんという傑作だろう人間という奴は！その崇高な理性、その感覚や表情の無限の働き」とハムレットで書かれている。神戸でもたくさんのシェクスピア劇を観た。
1971年の山本圭「ハムレット」との出会いはシェクスピア劇を身近にさせてくれた。60年代半ばから70年代にかけて、テレビ、映画で当時の青年たちを虜にしたのが田中邦衛、橋本功、山本圭、松山省二、佐藤オリエたち5人を中心とした「若者たち」であった。その流れの中での山本圭「ハムレット」（演出増見利清、オフィーリアは佐藤オリエ）が1971年に上演された。衣装も中世的なものから現代風に、舞台装置も簡素でセリフもスピーディであった。デンマークは牢獄だとハムレットに言わしめた時代と、1970年代を重ねて4人の若者（ハムレット、レアティーズ、フォーチンブラス、オフィーリア）中心の舞台。「ハムレットは状況に逆らって生きた」「オフイリアの狂気はやり切れない」「ハムレットの悩みと自分の悩みが重なってきた」「パイプは牢獄に見えた」等々、当時の若者たちに共感や感動を与えてくれた舞台であった。ただここ10数年、シェクスピア劇が途絶えている。

最後の役者魂－大滝秀治

高倉健、最後の映画となった「あなたへ」を偶然にも見ることが出来た。そこで老人役に出ていた大滝秀治が「久しぶりにきれいな海を見ることが出来た」というセリフに高倉健は、「あの芝居をまじかに見て、この映画に出てよかった」と主演俳優がコメントしている。それほどリスペクトしていた大滝秀治にとっても最後の映画となった。
60年代に生まれた名作「夜明け前」「オットーと呼ばれる日本人」「セールスマンの死」など滝沢修という名優の舞台だが、その名作を支えた多くの縁の下の力持ちがいた。いわゆる脇役と呼ばれた数多くの名優たち、嵯峨善兵、山内明、草薙幸二郎、下條正己、下元勉さらに永井智雄、三島雅夫、滝田裕介、伊川比佐志そして大滝秀治。その大滝も亡くなった滝沢・宇野に代わって奈良岡朋子とともに劇団を背負っていくようになっていった。大滝秀治が出演した多くの作品群の中で2004年の「巨匠」（ジスワフ・スコヴロンスキー作「巨匠」に拠る木下順二作、守分寿男演出）を紹介したい。
1944年、ナチスドイツに制圧されたポーランドのある村の小学校の教室。ゲシュタポの監視下に女教師、ピアニスト、医師、前町長、老人たちが暮らす。ゲシュタポが鉄道爆破された犯人、5人のうち4人を殺すと、老人は除外される。しかし、老人は「私は俳優です」と言ってゲシュタポの前でマクベスの朗読を始める。名のり、演じるは死を選ぶことになる。
なぜ、ハムレットでなくマクベスなのか、極限下における人間の有り様を演じた大滝秀治。
舞台と客席の緊張関係は最高に達した。残念ながら神戸での最後の舞台となった。
1973年、誕生した神戸文化ホール（中）での初公演、劇団民芸「円空遁走曲」（飯沢匡作・演出、滝沢修、宇野重吉、奈良岡朋子出演）にも大滝秀治は出演していた。
大滝秀治の最後の舞台となった坂手洋二作の「帰還」。神戸では上演されなかったが、東京まで観に行った。というのは坂手洋二といういわゆる新劇系でない作家の作品で、大滝にとっても初めての若い劇作家の作品にどう臨んでいくかの興味があった。物語はダム建設によってつぶされていく青春の故郷への帰還をめぐってであった。ちょうど紀伊国屋ホールでの公演の中日ごろに観

て、ご挨拶に楽屋を訪れた。私が楽屋でみたのは、一心不乱に台本に向き合っている大滝さんだった。80代半ば過ぎの大滝という名を成した俳優であり、すでに舞台に立っているにもかかわらず、作家の台本を読み込んでいる大滝秀治をみて、舞台の感動もさることながら私には、新劇俳優大滝秀治の魂に接した驚きだった。
ほぼ3年ちかく「神戸の舞台に立った俳優たち」の拙文を書いてきたがそろそろ終わりにしたい。まだ書ききれてない俳優たちはたくさんいる。それにテレビや映画に出ていない俳優たちもたくさんいる。舞台は有名や無名さらに名わき役等々で成り立っているが、勿論演出家、音楽、照明、舞台装置など多くの裏方に支えられている。さらに劇場の規模そして何よりも観客によって演劇は創造される。神戸では無名の俳優たちによる優れた演劇はいっぱい上演されている。機会があれば、その名も知らぬ「名舞台」を紹介したい。

生活の問題とは何か ― 上田耕一郎（2022. 7）

米田　哲夫（竹の台）

参院選が始まっている。ユーチューブで参院選で芸能人が投票を呼びかけている。
「ぼくは本当の意味で多様性を実現したい」（りゅうちぇる）
「自分たちの未来の話だから」（長澤まさみ）
「多様性と未来」若い人たちが民主主義と平和を願っているように見えた。私も彼らと同じように家族や友人たちにそう呼びかけたい。ただ私にはもう一つある。
それは改憲派議員を参院において三分の二を与えないことを。
今、暮らしと「生活」が極めて危ない。そんな折りに、井上光晴作、小松幹生脚色の「明日－1945年8月8日・長崎」の原作と戯曲を読んだ。抑圧された中でのささやかな市民の苦悩や喜び、さらに戦争への批判等の生活が描かれている。結婚式が行われ、入手しづらくなった料理での宴席で、広島で新型爆弾が落とされたことが話題になる。恋人への感情を持てあまして夜の町をさまよう若者。病院を追い出される娘をどう迎えにいくか、そして、8月9日に無事子供を産み喜び合う母と娘という風に、原作の10章からなる静かな市民生活が舞台に載る。読んでいてウクライナ市民の生活への思いがつのった。たぶん長崎と違ってもっと安楽でゆったりと過ごしていただろう。そこへロシアの侵攻、戦争はそんな市民の生活を全て奪ってしまう。
生活って何だろうと思った時に若い20代に読んだ「生活の問題とは何か」を思い出した。読み返してみてそれは今も輝き今日に生きている。ぜひみなさんに紹介したいと思って投稿した。
「『生活』という使いなれた言葉から何を思い浮かべるだろうか。それは第一に、いっさいの人間の諸活動を個人の場で切り取ったもの、すなわち、一人ひとりの人間にとっての一個の小宇宙を意

味している。人間の尊厳も栄光も、その創造性も未来もすべて生活の中にはらまれ、はぐくまれる。『一個の生活は地球より重い』と言われるのと同じように一人ひとりの生活はなにものにもまして貴重であり、一人ひとりの、自己の生命と生活のかけがえのない貴重さにたいする誠実な態度が、すべての人類の生命と生活につながるものである。自分の生活を大切にすることなくして、他人の生活を尊重することはできないし、他人の生活を犠牲にして自己の生活を人間的に生きることはできない。人間の進歩が、人間全体の物質的・精神的生活の成長と向上にあるとすれば、すべての富、すべての科学技術、あるいは芸術、理論、あるいは組織、制度もまた、結局はその社会の成員のゆたかで幸福な生活のためのものでなければならず、この意味では、私たちの生活とは、これらすべてのものの価値を測る究極の基準に他ならない。『生活』という言葉はすべての希望と理想が託されている」
1973年、上田耕一郎「先進国革命の理論より」（岩波講座「現代」第一巻「現代の問題性」から掲載）。
なお、「明日－1945年8月8日・長崎」は青年座公演で、神戸演劇鑑賞会で8月19日（金）20日（土）に文化ホール（中）上演されます。希望者は私まで。

無名の俳優たちが創った名舞台（2022.10）

米田哲夫（竹の台）

以前にも書いたが、演劇への興味・関心度は他の文化芸術に比べてまだまだまだ弱い。従って「神戸の舞台に立った俳優」は主に映画、テレビ等で活躍する俳優たちを中心に、少しでもみなさんに関心を持ってもらおうと書いてきたが、名優たちでない無名の俳優たちが創り上げてきた優れた舞台はたくさんある。それを紹介したいが、さらに演劇は総合芸術と呼ばれるように、舞台装置－舞台美術、舞台音楽、舞台照明、さらに舞台衣装や効果音、メークアップ，そして舞台そのものや舞台の幕等が寄り添いあって演劇がつくられている。神戸での舞台でそういったものも少しは触れながら、まったく私の独自の判断で選んだ作品を紹介したい。

「郡上の立百姓」小林ひろし作：早川昭二演出

長年教師を勤めていた小林ひろし（劇団はぐるま主宰）が、200年前の宝暦年間の郡上の百姓たちの年貢取り立ての抵抗の物語を、地元のおじいさんおばあさんたちから聞き出し演劇にしたのが「郡上の立百姓」である。
1964年に新劇団の訪中公演として取り上げられ中国各地で上演されたものを劇団民芸が早川昭二演出で全国で上演し、神戸では、1966年1月に国際会館の大ホールの舞台に取り上げられた。

江戸時代中期、幕藩体制に矛盾が出てくるころに農民一揆のはしりとしておこり、その一揆により藩体制が取り換えられるという歴史上考えられないことが百姓たちによってなしと遂げられたのだ。過酷な検見取り（年貢取り立て）に対して郡上130ケ村の百姓たちは立ち上がり4年半に渡って闘い続けた。この間、金森藩は切り崩しにかかり百姓たちは「立百姓」「寝百姓」と対立をあおるが、立百姓たちは江戸へ直訴に出かけるのであった。
60年安保の後、安保挫折とかいわれている頃に、百姓たちの命がけの闘いに当時の若者（私は22歳）たちは大いに励まされ勇気づけられた。「感動して涙が出た」「俺の職場と同じや」「こんなにもたくましい農民が生きていたのか」等々数多くの感想が寄せられた。個人的には、何よりもこんな民衆の歴史を知った喜び、そんな民衆のエネルギー演じた俳優たちのアンサンブルに感動した。
ちなみに、3人の労演男性会員が百姓として舞台にたった。私もその一人で、くたびれた百姓のカズラと衣装に身を包み、顔をどろどろにして舞台上で「郡上かわさき」をうたった。若き吉行和子さんを目の前にして震えたのを今でも覚えている。
なお、この舞台に立った「無名」の俳優たち―山内明、佐野浅夫、鈴木瑞穂、嵯峨善兵、草薙幸二郎、三崎千恵子、吉行和子、笹森みち子さんたちは当時から今日まで日本の演劇、映画を支えてきた人たちである。
また、演出家早川昭二さんは70年代初頭に民藝を退団し、劇団銅鑼を作って
多くの名作を神戸の舞台にのせてくれた。

神戸で観た感動の芝居 ②
東京演劇アンサンブル公演「奇跡の人」（W・ギブソン作：広渡常敏演出・台本）
米田哲夫（竹の台）

おそらく女優になればどうしても演じたい役、例えば「女の一生」の布引けいや「ハムレット」のオフィーリアように、この「奇跡の人」のアニー・サリバンもその一つであろう。1964年に有馬稲子のサリバンで上演され、その10年後、1974年1月に神戸文化ホール（中）でほぼ1週間上演された。その後多くの女優が演じたが、この神戸では全く無名の辻由美子がサリバンをヘレンも宮本満里子と東京演劇アンサンブルという劇団内の女優が演じた。彼女たちの力演も素晴らしかったが、人間の限りない可能性、言葉の素晴らしさを私たちに示してくれた優れた舞台であった。

物語は、1880年代アメリカ南部。ヘレンは幼いころに光と音そして言葉の世界を失う。盲学校の生徒であったアニーはヘレンの家庭教師に雇われる。彼女には20歳という若さと「心にとって言葉は、目にとっての光以上のもの」という信念があった。ヘレンの発達にとって溺愛する両親の愛情や憐れみは大きな障害で、庭の小さな小屋で二人っきりの生活を始める。アニーは「最初も最後も…中間も」と言葉を教える―言葉こそが人間の意志をつながせるものであり、闇の世界から抜け出せるものでもあると、血みどろの格闘が始まる。やがて、アニーはヘレンがこぼした水を自分

で汲ませるため庭の井戸へ連れていき、ヘレンの手に冷たい水が流れていった。この時、アニーはヘレンの手に指文字で「WÀTER」と書き、ヘレンは赤ん坊の時の言葉が蘇ってくる奇跡だった。

文化ホール（中 ）での4ヶ月目の舞台 。客席は圧倒的な感動に包まれた。「WATER に続いてのI LOVE YOU は最高だった」「多くの感動と認識を与えてくれた」「たぶん生涯忘れることができない舞台になるだろう」と多くの感想が寄せられた。
ヘレンは自伝でこう書いている「物には名前があるとわかった時、一つ一つの名前はそれぞれが、新しい思想を生んでくれました。私の手に触れるあらゆる物が生命をもって躍動しているように感じ始めました」。

SNSをはじめとして今日ほど言葉が荒れているときはない。私たちはもう一度、“ことば”のもつ人間性を考えてみたい。
東京演劇アンサンブルは、1954年に旧「三期会」と言われたように俳優座養成所（仲代達矢、加藤剛たちを生んだ）三期生で作った劇団。ブレヒトの小屋をつくり、商業主義にとらわれないで「演劇行為の中に人間の変化の契機をつくる」という創造活動を行っている。現在は「銀河鉄道の夜」を全国公演中。私が神戸労演で初めて見た芝居は、1962年8月「長い夜の記憶」広渡常敏演出だった。
1968年に見た木下順二作広渡常敏演出の「蛙昇天」は後日お知らせしたい。

神戸で観た感動の芝居 ③
前進座公演「出雲の阿国」（有吉佐和子作：津上忠脚本・演出）

米田哲夫（竹の台）

たぶんお国も女優にとって演じたい役だろう。1972年7月国際会館大ホールで前進座公演「出雲の阿国」を津上忠が脚色して自らが演出した。舞台化されるときお国役をやる女優がいるだろうかと心配されていた。踊りや歌舞伎の所作などの基本を集団でしっかりと学び、稽古している前進座は男優であれ、女優であれそれは心配なかった。いまむいずみが抜擢され、いずみは見事にお国を演じた。

16世紀末、秀吉が栄華を誇っていたころ、淀君に招かれ四条河原町で念仏踊りを舞う出雲の巫女阿国の一座。物語はこうして始まった。

阿国は出雲の国を南から北へ流れる斐伊川、上流から流れる鉄鉱石を製錬して鍬や鋤、刀などをつくる鑪（たたら）に育った。女たちは川から水をくみ取り、川桶に入れて石を踏んで運ぶのが仕事だった。お国は幼いころから軽い足さばきで水を運んだ。そこにはリズム感を伴った労働があり、手と足を併せて体が動く、踊りの基礎となるものがあった。

阿国は貴人の前で踊るよりは河原の民衆の前で踊る方が楽しいと。しかし、歌ったり踊ったりして何が育つ、誰の腹がくちくなるかと悩みながら踊る。念仏踊りはやがて歌舞伎や能へ「かぶいて」いく。阿国は「かぶいていく」か、民衆の踊りかを葛藤しながら出雲へ帰っていく。出雲でも鑪の娘として育った阿国は戦のために苦しむ斐伊川の人々のために踊り始める「根無し草になるまいぞ」と。

私たちのような労演（演劇鑑賞運動）にとって演劇とは何か、演劇を楽しむ民衆とは、あるいは創造する俳優、劇団にとっての演劇とはを、この「出雲の阿国」は私たちにたくさんの感動を与えてくれた。しかも、前進座という商業歌舞伎のようなものではなく、誰でもが歌舞伎役者になれる劇団が公演したことにも大きな意味があった。

幾つかの感想と劇団前進座を紹介したい。

「涙が溢れるぐらい感動しました。阿国の踊る踊りに土のにおいを感じた。」「色彩豊かな舞台、舞いの美しさ、舞いとセリフの組み合わせ最後まで目を皿のようにして鑑賞した私にびっくり。」「終演に拍手が鳴り響き、カーテンコールがすんでもしばらく座ったままの私。型にはまった文化と、下から創り上げていく文化、私たちが何のために会費を払って観に行くのか問いかけてくれました。」

前進座は1931年（満州事変）の年に創立した。歌舞伎界の門閥制度から独立して、「劇団の収入によって座員の生活を保証する、民衆の進歩的要求に応える演劇創造、全座員の手による最高決議機関総会の設定」など当時かなり民主的な劇団の創造、運営を行った。当時の歌舞伎界に批判的だった伝統歌舞伎の河原崎長十郎やそうでない大部屋的な中村勘右衛門らが創立に参加した。演目は時代劇、現代劇、児童劇など多彩であった。戦後すぐ前進座は全国へ巡回公演を行い、戦後の民衆に芝居の楽しさを伝えるとともに、全国各地で演劇鑑賞組織（労演）が誕生していくきっかけにもなった。また吉祥寺に劇場と劇団をかまえ集団生活をしながら演劇を創造していた。

神戸ではたくさんの公演がなされているが、いくつか代表的な作品を紹介する。

1956年「鳴神」「仮名手本忠臣蔵」「芝浜の革財布」、
1962年「天平の甍」、1969年「俊寛」、1976年「さぶ」、
1986年「一本刀土俵入り」（中村梅之助主演）、
2022年「ひとごろし～喜劇一幕」

ちなみに、「阿国のお墓」は出雲大社から歩いて行ける小高い丘にあり、私が訪れたときにはお国を演じた女優（太地喜和子たち）のお供えがあった。

また、有吉佐和子の作品では1987年4月に文学座公演「花岡青洲の妻」が杉村春子主演で上演されている。

神戸で観た感動の芝居 ④
神戸の舞台に初登場―井上ひさしの舞台
テアトル・エコー公演「道元の冒険」「11匹の猫」

米田哲夫（竹の台）

新しい年を迎えてお喜び申し上げます。

ほとんど全てと言っていいほど私にとって芝居とは？は「夜明け前」「炎の人」などリアリズム演劇に感動や喜びを味わっていた。芝居を観始めてほぼ10年たち、舞台がこんなにリズミカルで言葉と笑いの楽しさを覚えさせてくれたのが井上ひさし作品である。

1972年3月、井上ひさし作、熊倉一雄演出の「道元の冒険」と、73年9月これも井上、熊倉コンビによる「11匹の猫」である。

井上ひさしは1964年にNHKの連続人形劇「ひょっこりひょうたん島」の脚色でデビューしている。大きな反響を呼んだ人形劇は5年間続いた。この時、熊倉一雄は声優として出演していて二人の関係はこの時に生まれていた。

「道元の冒険」、時は1243（寛元元）年に始まる。幼くして両親を亡くした道元は、一門の期待を振り捨てて叡山へ。入学するが期待外れの学校、叡山を去って次は臨済宗の栄西のもとへ。そこにも失望して遂に中国宋の国へと旅立っていく。希望に満ちて出合ったのがまことの師天童如浄。帰国して禅の思想を広めようとしたが、既成の仏教連合体や朝廷からの圧力にあう…と、そし冒険は続いていく。中学3年の時にカトリックの養護施設にいた井上ひさしは、その時に宗教観が育ち、既成の権力への批判精神もこの時に生まれ、その後の舞台づくりに反映されていったと思う。

感想文には「久しぶりに笑った。観終わった後でもセリフ、ギャグの楽しさが目に浮かんでくる」「労演はこんなコミカルな劇もやるんだな、ミュージカル的な要素を随所に盛り込みコミカルだった。」と初めての井上ひさしとの出会いは上々だった。

「11匹の猫」も冒険と希望に絡んでいる。学者や、ベトナム行きのGIたちのペットであったネコたちが捨てられ腹ペコ状態で出会う。雄々しく凛として生きようとするが食べ物がなく、にゃん作老人の提言で「北の空、キラキラ輝く星の下、大きな湖には途方もなく大きな魚」を求めて旅に出る。魚はなかなか手強くネコたちは疲れていくが、魚は子守歌に弱いとわかり、コーラスで子守歌を歌って魚をしとめる。11匹のネコはその地にネコ天国を建設する。10年の歳月を経て、ネコたちの社会は高度に発達していく。ネコたちもみんなえらくなり大出世するが、やがてネコたちはあの元気

で溌溂としていた腹ペコの時代は何だったのだろうと思い出す。戦後の日本への風刺を兼ねた舞台となった。

感想には「いや一面白かった。さすがテアトル・エコーよくまあこれだけ飛んだり跳ねたりまさに芸術ご苦労様でした。この劇には若さと明るさと民主主義と正義があふれていた」と評価は高い。

「冒険」も「11匹」にも私と同様に多くの人は、リズミカルな明るい、言葉豊かな舞台に、演劇の新しい未来を感じたのではないだろうか。井上作品を紹介する前に、テアトル・エコ―を少し紹介したい。熊倉一雄、たぶんあのだみ声の独特のしゃべり方を覚えている人はたくさんおられると思うが、その熊倉を中心としたエコ―は1956年に誕生した。キノトールを柱にして喜劇を中心に、主に井上ひさしや酒井洋子のニール・サイモンを上演し続けた。1970年に恵比寿に79人の小さなユニークな劇場もつくった。私も何度か観にいったが、この劇団は休憩の時間に飲み物とお菓子を配って私たちを舞台と同様に楽しませてくれた。

さて、井上作品だがその前に、昨年末に政府は、国民との議論、もちろん国会でも議論せずに、防衛三法を閣議決定した。まさに戦争への道を進み始めた。おそらく9条の会設立の一人である井上ひさしは、あの世で、少し出張った笑顔で怒っておられるだろうと想像して、次の井上ひさしの言葉で新年を迎えたい。

第九条のこと

もう二度と戦争はしない、という第九条ができてから、日本国家が国としてよその国の人を殺したり、武器をつくってよその国に売ったりしていません。

世界でもこんな国は、まれです。胸を張っていい。戦争や病気で苦しんでいる人々を助けるために、日本ができることは、武器や兵士を外国へ送ることではないはずです。…
言葉をもち、その言葉で気持ちや考え方を交換し合う能力があります。無駄な争いはやめて、なかよく生きることもできるはずです。

ちかごろ、この九条の中身が古いという人がいます。「平和主義」という言葉は古いでしょうか。問題が起こっても、戦争をせず、話し合いを重ねて解決していく。その考え方が古くなったと私には決しておもえません。むしろ、このやり方はこれからの人類にとって大切ですから、第九条は新しいものだといっていい。…「平和主義」という考え方は、人類にとっての理想的な未来を先取りしたものだといえます。

井上ひさし「子でもたちにつたえる日本国憲法」(絵―いわさきちひろ)より

次回は、「父と暮らせば」「紙屋町桜ホテル」の紹介や井上ひさしの記念館「遅筆堂」などを紹介したい。

神戸で観た感動の芝居 ⑤

神戸の舞台に名作の数々―井上ひさしの舞台

こまつ座公演「父と暮らせば」

米田哲夫（竹の台）

まもなく3月11日がやってくる。2011 年5月に八戸、仙台、福島の演劇鑑賞会を訪問した。
1995年1月の神戸での大震災の折、全国の鑑賞会や劇団から多大の物資両面にわたる支援、励ましを受けた。そのお礼とお見舞いを兼ねて東北を訪れた。
詳細は省くが、仙台、八戸に比べて、福島の駅の光景は、それは人の少なさと静けさを今も覚えている。その帰り道に山形県米坂線羽前小松駅に降りて井上ひさし記念館「遅筆堂」へ行った。

むずかしいことを やさしく
やさしいことを ふかく
ふかいことを おもしろく 井上ひさし

「遅筆堂」は川西町フレンドリープラザにあって劇場も含めて「遅筆堂」が主要な施設。井上ひさしから戯曲、小説、資料等々22万点が寄贈されている未曽有の蔵書。井上ひさしの子どものころからのプロフィールや全戯曲の展示や読み聞かせなど様々な催しが行われていて、「読み聞かせ日本国憲法」の動画の放映も行われている。ちなみに、劇団こまつ座の由来は井上ひさしが生まれたのが山形県の小松(現在の川西町)町の小松から”こまつ座”と名づけられた。

1997年7月「父と暮らせば」(鵜山仁演出、すまけい、梅沢雅代出演)が上演された(2015年7月に再演)。
物語は簡素で、8月6日の広島原爆投下から3年後、ヒロシマの図書館に勤める福吉美津江(梅沢雅代)は、あの日目の前で父(すまけい)を見捨てて生き残ったことを負い目にひそやかに暮らしていた。そこへ、原爆に向き合って生きる青年に出合い、好意を抱くようになり、やがて恋心が芽生えていく。しかし、美津江は自分の恋心をかたくなに押さえつけ様としている、そこへ亡くなった父が恋の応援団長として現れる。美津江の心を開かせようと二人の会話が始まる…。
原爆のむごたらしさ、恐ろしさ、投下への怒りなどリアルな表現はなく、ただ、原爆体験を伝える父と娘、その恋人の対話による舞台。優れた原作のもと、すまけい・梅沢雅代らの質素な演技による感動の舞台。当時の幾つかの感想を紹介する
・すまけいさんの持味が100%生かされていて、父娘の細やかな情愛があの原爆の悲惨さに負けることなく生きていく人間の尊厳さが光っていて、怒りが静かに…
・はじめ広島のことで泣き、途中で地震のことを思い出して泣き、そして両親のことを思い出して泣きました、湊川で酒を飲んで…
・重くて暗いテーマなのに娘の恋心を心配する父とのキャッチボール、ほのぼのとしてて、さすが井上ひさし…

大江健三郎さんが井上ひさしの「父と暮らせば」でこんなことを書いている。
私と同時代で井上ひさしと並ぶ偉大な劇作家木下順二さんの「神と人の間、第二部・南方のローレンス」という大きい戯曲に、「取り返しのつかないものを取り返す」という台詞が出てきます。
…。井上ひさしさんが「父と暮らせば」に書かれた…原爆で亡くなってしまった父が娘のもとへ現れて、それは娘が自分の心に、死んだお父さんを呼び寄せてということですが、その上で彼女に「未来がある」ことを発見させる。すなわち、“取り返えせない”死者のお父さんがあらわれて、「おとったん、ありがとありました」と娘の言葉が返される、こういうことですね、それが「取り返しのつかないものを取り返す」ということだと思うのです。

福島の原発の事故は、まだ続いています。…その何より苦しいこと事の外側にいながら、そこで苦しむ人たちに「取り返しのつかないものを、取り返してください」というようなことを私は言えない。しかしですね、将来の子どもたちのことを考えれば、日本全体の上空をふさごうとしている放射能の問題において、もっとあからさまに、私らみなの将来に向けて、取り返しのつかないことがなされているのです。しかしいま私たちの国で、この国びとのなかで、その取り返しのつかないことを「取り返してやろう」という心の働きが、しっかりあると私は思う。私らみなの心の働きが実っ

て、原発事故のもたらしたものと対抗してゆけば、30年後、50年後、大人になった子どもたちによって、私たちにありがとうございました、と言われ、また私たちが将来の人たちに対して、ありがとうございました、「ありがとありました」ということができるようになりうるかもしれない。

「取り返しのつかないものを、取り返すために―大震災と井上ひさし」
著者：大江健三郎、なだいなだ、小森陽一他 岩波ブックレット 814 より
次回は、「紙屋町さくらホテル」他井上ひさし上演作品を紹介。

神戸で観た感動の芝居 ⑥

神戸の舞台に初登場―井上ひさしの舞台

「紙屋町さくらホテル」「化粧」

米田哲夫（竹の台）

大江健三郎さんについて前回、「取り返しのつかないものを、取り返すために」（岩波ブックレット）を書いたが、3月3日亡くなられた。日本の知、日本の良心と思っている。残念。9条の会（事務局）が哀悼文を書いている。「世界」4月号でも小森陽一さんが加藤周一さんの呼びかけに答えて9条の会設立へ、大江さんを訪ねる追悼文も。

「紙屋町さくらホテル」（鵜山仁演出）が2006年6月に上演された。物語は、昭和20年。移動演劇隊「さくら隊」が広島で「無法松の一生」を上演していく。名優と言われた丸山定夫が出演し、映画「無法松の一生」（坂東妻三郎主演）で夫人を演じた宝塚の園井恵子も出演した。アジア太平洋戦争が末期のころ、弾圧された新劇は大政翼賛会に入ることを余儀なくされる中、抑圧された生活をしている民衆に、「さくら隊」結成して舞台を届けた。舞台づくりは粗末で、丸山、園井以外は殆ど素人で中には密使と言われた海軍大将や陸軍の密偵も出演。
開演を明後日に迫ったホテルでの稽古中に被爆…。
井上作品、演じられる背景に比して大いに笑う喜劇。その中で、国家と民衆、民衆と演劇、そして被爆と戦後と様々な課題を感じさせてくれた名作。1997年に開場した新国立劇場の旗揚げ公演だった。広島平和公園の近くに「紙屋町さくらホテル」の記念碑が建てられている。
管理は演劇鑑賞会広島市民劇場が行っている。

一人芝居の名作「化粧」は1997年12月（木村光一演出）と2011年2月（鵜山仁演出）二度上演されている。初演は渡辺美佐子、二回目は平淑恵が演じている。とにかく初演は衝撃的な上演で、当時の客席は渡辺美佐子の一人芝居に酔わされた素晴らしい感動を覚えた。旅芝居を続ける女座長

は鏡を前に化粧をしながら語り始める。鏡を前には客席が鏡になっていて客席に向かって語り始める。女座長は、化粧しながら着替え、舞台に現れない座員や訪問客と語る。語り掛けられる観客の私たち、初めての経験。今まで味わったことのない緊張関係が舞台と客席に起こった。
渡辺美佐子は役者として全ての演技力をその役に集中する、彼女はその疲れは観客の反応に助けられると言われている。最も役者冥利につきている。観客の私たちはたった一人しか出ない役者の台詞、うごきに様々な想像力や感性を豊かにしながら舞台に向き合う。この芝居で神戸市から助成金を頂き、渡辺美佐子さんと当時の笹山市長にご挨拶に行ったが、二人は鹿児島県出身、芝居より鹿児島の話に花が咲いていた。
一人芝居はこの後、いくつか上演された名作がある。機会を設けて紹介したい。

他に神戸で上演された井上ひさし作品。

1977年 五月舎「雨』木村光一演出
1982年 五月舎「イーハトーボ―之劇列車」木村光一
1995年 地人会「藪原検校」木村光一（震災のため中止）
2001年 こまつ座「闇に咲く花」栗山民也
2003年 こまつ座「頭痛肩こり樋口一葉」木村光一
2020年 人形劇団クープ「うかうか三十ちょろちょろ四十」井上幸子
2021年 こんにゃく座「オペラ イヌの仇討あるいは吉良の決断」
上村聰史
2022年 こまつ座「雪やコンコン」鵜山仁

「炎の人」文化座紹介（2023.10）
米田哲夫（竹の台）

パソコンが損傷し、また体調もすぐれないこともあってしばらく演劇の紹介を休んでいましたが、10 月末に戦後の新劇の名作「炎の人(ゴッホ小伝)」(鵜山仁演出)が上演されますので、その紹介もかねて上演する劇団文化座についても紹介したいと思います。

1951年滝沢修で上演された「炎の人(ゴッホ小伝)」は滝沢修のゴッホかゴッホの滝沢修かといわれるほどの評価を受けました。他に、大滝秀治、市村正親、仲代達矢名優たちが演じてきました。作者三好十郎の作品を数多く上演してきた文化座は森幹太で全国上演してきました。
今回はゴッホと同年代の藤原章寛が人間ゴッホに挑みます。

物語は、「ゴッホ小伝」と言われているほどゴッホの生きざまを描いています。炭鉱での貧しい炭鉱夫たちを支援してきた福音伝道師ゴッホは非力さに打ちのめされその職を解かれてしまいますが、いつしか老婆をコンテに描き始めます。生涯ゴッホを支援した弟テオの援助でパリ，アルルへと移り住んだゴッホは印象派の画家、ベルナールやロートレックたちと、とりわけ尊敬と憧れのゴーギャンと芸術の在り方を悩みながら求めていきます。三好十郎は「ゴッホを描くことは、結局は自らを描くこと」と芸術と観客のありようを迫ってきます。うちひしがれ耳切りにまで及ぶゴッホ…。終幕、舞台は「貧しい貧しい心の日本人よ」と観客である私たちに呼びかけられる「ゴッホ賛歌」の朗読は静かな拍手とともに感動が沸き上がってきます。

文化座は1942（昭和17）年に佐々木隆、山村聡、山形勲、鈴木光枝たちにより創られ、三好十郎と組んで「獅子」など数多くの作品を上演してきた。44年に満州へ慰問公演に出かけ。同地で終戦を迎える。商業演劇はじめ”国策協力劇“が上演されていた中、新劇団はそれにくみさず、その手前で「よい芝居」を作っていこうと苦肉していた。戦後、三好十郎の「その人知らず」などの活動から、山形らの退団後、「荷車の歌」や「土」などで全国公演へと広がり、「炎の人」など佐々木隆演出で粘着力のある劇団へとなっていった。

その後、佐々木隆、鈴木光枝の娘、佐々木愛が劇団に参加し、数多くの舞台が神戸でも上演されることになる。

「炎の人」は 10 月31日 (火)18:30
11 月　1日 (水)13:30
神戸文化ホール(中)にて上演

ご覧になりたい方は竹の台米田(090-8658-8579)まで

女性の生きざまと沖縄にこだわった劇団「文化座」（2023.11）

米田哲夫（竹の台）

1963年、神戸港の労働者を描いた「埠頭」（小幡欣治作、佐々木隆演出、鈴木光枝出演）以降長く神戸での文化座の公演がありませんでした。14年後の1976年に名作「荷車の歌」（山代巴作、佐々木隆演出、鈴木光枝主演）を神戸で上演して以来「炎の人」まで24本の作品を上演しています。

「荷車の歌」は明治、大正、昭和と中国山脈の山奥で生きたセキという一人の女性が大地に生きる喜びを高らかに歌い上げた舞台で神戸はおろか全国に響き渡りました。舞台では鈴木光枝の娘佐々木愛が初めて神戸の舞台に立ち、文化座の未来をも私たちに示してくれました。原作者山代巴さんは昭和 30 年代の原水爆禁止運動の創成期に「大地に生きる多くの人たちの活動、平和を願う多くの人たち活動の副産物」として生まれたと言っています。まさに文化座という劇団の原点というべき舞台でした。

以降、文化座は 1983 年「土」（長塚節作、佐々木隆演出、佐々木愛出演）、1984 年「おりき」（三好十郎作、鈴木光枝演出・主演）と土の匂いがする舞台を、さらに多くの女優たちが演じている「三婆」（有吉佐和子作、貝山武久演出、鈴木光枝主演）はその走りとして 1988 年に上演している。2018 年に再演。さらに南の国へ売られていく女性を描いた 1978 年に「サンダカン八番娼館」（山崎朋子作、鈴木光枝演出、鈴木光枝、佐々木愛出演）、1981 年には「あめゆきさんの歌」（山崎朋子作、鈴木光枝演出・主演）。また、越後の薄幸の女性を描いた水上勉の「越後つついし親不知」は木村光一演出で佐々木愛が主演し、1983 年に上演されています。また、女性のたくましさを描いた「女と刀」（中村きい子作、鈴木光枝演出・主演）と「啄木の妻」（渡辺喜恵子作、貝山武久演出、佐々木愛主演）も文化座の一つの女性路線でした。文化座、鈴木光枝、佐々木愛さんたちは舞台だけでなく、サークルや会員との繋がりを大切にしていました。劇団員との交流会は盛んに行われ、私たちは、俳優としての交わりだけでなく、人間としての繋がりが生まれ、舞台や劇団への期待や興味がいっそう高まりました。高齢にもかかわらず鈴木光枝さんは高倉台のサークル・会員の集まりに地下鉄に乗ってまで参加されたことは劇団の素晴らしい姿勢でした。

佐々木愛と沖縄

神戸での沖縄を描いた演劇は 1960 年代に木下順二の「沖縄」以来、久しく上演されていません。そんな中、1986年に「海の一座」は謝名元慶福の原作で（八木貞男演出、佐々木愛出演）で上演されました。沖縄の青い海を島から島へとサバニと呼ばれる船に乗って三線を弾いて旅する「海の一座」の物語。たどり着いた島は太平洋戦争末期、島民が集団自決した島だった…。まさに、佐々木愛が沖縄を取り上げていく最初にしてふさわしい舞台でした。この時の原作者謝名元慶福との「縁」なのだろうか、佐々木愛の語りによる二つのドキュメンタリー映画「いのちの海 辺野古 大浦湾」「いのちの森 高江」はその謝名元慶福が監督をして、美しい沖縄の自然と基地を描いた作品は全国各地で上演されています。

以降、2003年には「若夏に還らず一最後の学徒兵よりー」（堀江安夫作、佐々木雄二演出、津田二郎出演）、2016年「銀の滴降る降るまわりに一首里1945」（杉浦久実作、黒岩亮演出、佐々木愛主演）、2018年「命どう宝」（杉浦久幸作、鵜山仁演出、佐々木愛出演）と上演しています。「命どう宝」は文化座創立75周年記念として阿波根昌鴻と瀬長亀次郎を描いた作品で、佐々木愛は映画「沖縄」（1969年武田敦監督、山本薩夫プロデューサー）出演したのがきっかけで瀬長さんとの交流が始まり、「命どう宝」に繋がったのではないかと考えています。

思えば三好十郎の「炎の人」がきっかけでこの文章を書き始めましたが、三好十郎の「俺は愛する」という作品の千秋楽が愛さんの誕生日で、それにちなんで「愛」と付けられたと言われています。80歳になっても劇団の代表として、劇団の歴史を背負い、今日の日本の平和を願った作品作り、そしてこの10月にも神戸の舞台に立つ佐々木愛さんに拍手を送って終わりたいと思います。

韓国の国民的詩人―ユン・ドンジュ（尹東柱）の
舞台「星をかすめる風」を観ませんか？　　（2023.12）

米田 哲夫（竹の台）

開幕時、遠くに、シューベルトの「冬の旅」が聞こえている…。雪がちらちら降っている。哀し気なピアノの音色と、絶望を歌うような男性の声が雪に吸い込まれていく。客電が落ちていき、場内は闇に包まれる。闇の中、ピアノと歌声が高まっていく。美しく、退廃的な歌声。音楽が極限まで高まった刹那、落雷の音と共にかき消される。…。（上演台本より）。

真幕開きのト書きです。座った客席での幕開きの舞台のイメージ湧いてきますか。舞台へこうして浸っていきます。

イ・ジョンミヨン「星をかすめる風」鴨良子訳（論創社刊）＝原作、シライケイタ脚本・演出：秋田雨雀・土方与志記念青年劇場公演。

物語は、終戦間際の福岡刑務所。看守の杉山が殺されその犯人探しに、仁保音名平沼東柱こと尹東柱（ユン・ドンジュ）が関係していることが見えてくる。尹東柱の美しい詩が奏でながらミステリー風に舞台は進む。詩―文化が心を動かしていくことが見えてくる。ピアノと星、そして風が揺れてくる美しい舞台が続く。

師走の 12 月、美しい詩と音楽の舞台ご覧になりませんか。
12月21日（木）18：30、22日（金）13：30、
神戸文化ホール（中）

さて、秋田雨雀・土方与志記念青年劇場とはどんな劇団でしょうか。劇団名の前に秋田雨雀と土方与志の両名は、戦前の新劇運動の中心的な指導者で、その名を冠にしたのは、その歴史と伝統を引き継いだ演劇活動を行うという決意であった。いくつか神戸での舞台を紹介しますので、ご理解をしていただきたい。

初めての神戸での舞台は1958年千田是也・下村正夫演出、B・ブレヒト作「ガリレオ・ガリレイの生涯」井上昭文出演で、あと1970年に堀口始演出、山内久他作「若者たち」後藤陽吉出演（俳優座の山本圭や田中邦衛の出演ではなかった）でした。そのあと他いくつか上演されていくが、中でも多くの人を感動させた舞台を紹介したい。1982年の瓜生正美演出大谷直人作「青春の砦」葛西和雄出演は、アジア太平洋戦争真っただ中の昭和18年春、清水商船学校が新設され、そこで学んだ青年たちの愛と友情と信頼の砦を守るための青春群像でした。遠い海のかなたに青春の想いをはせた舞台は当時の若者に爽やかな感動を与えた名作でした。
青年劇場は戦後一貫して喜劇を書き続けた飯沢匡（ヤン坊ニン坊トン坊の作者）との舞台づくりを積極的に続けた。そうした中で、生涯喜劇、特に民衆には温かく権力者へは批判的な風刺劇を書き続けた黒柳徹子が師と仰いだ飯沢匡の演出作品が神戸の舞台ができた。1994年「喜劇キュリー夫人」jノエル・ファンブック作、飯沢匡演出でした。テレビでしか出会えない黒柳徹子との舞台は神戸での演劇鑑賞会の私たち会員にとって大きな喜びでした。ちなみに、黒柳徹子出演の他の舞台は1990年に劇団NLT＋博品館劇場提携のメルヒオール・レンゲル作を飯沢匡演出で「ニノチカ」が上演されました。

青年劇場は2013年、沖縄の普天間基地を真正面から向き合った逆手洋二作、藤井ごう演出「普天間」を神戸で上演しまた。いわゆる出自が「新劇畑」でない坂手は、沖縄を描くにあたって、全国津々浦々でやってもらえるのかを条件に書き始めた。多面的な取材を重ね取材で出会った人々の言葉をそのまま舞台にあらわした。そして「原発事故で亡くなり、まだ遺骨が残されている人々と

未だに人骨が出てくる沖縄の現状を重ね合わせて、沖縄・福島・広島・長崎が私たちにつながる作品をつくりました。日本の現実を考える衝撃的な感動があった。

こうして現代日本の矛盾と向き合った作品を上演してきた青年劇場年末の忙しい時期ですが韓国の詩人尹東柱を描いた「星をかすめる風」ぜひご覧になってください。

神田香織さんが所属していた劇団
「東京演劇アンサンブル」の紹介舞台　（2024.1）

米田 哲夫（竹の台）

この 4 月の記念のつどいに講演を予定している講談師神田香織さんの経歴で、劇団に所属していたと言われています。神田さんへの期待を高めていくためにその劇団：「東京演劇アンサンブル」を紹介します。

東京演劇アンサンブルの旧名は三期会と呼ばれていました。三期会は60年代から70年代にかけて演劇・映画界で大活躍していた俳優座養成所（仲代達矢、宇津井健，佐藤允、栗原小巻らを輩出）の三期生で、1954年に創られた劇団です。

20世紀最大の劇作家と言われるブレヒト劇を中心に（ブレヒトの芝居小屋を創設）、現代社会に生きる人間像を描く名作を創ってきました。

神戸で上演された幾つかの作品を紹介したいと思います。

1964年 「長い夜の記録」女子工たちの文集での創作劇、広渡常敏演出

1968年 「蛙昇天」木下順二作 広渡常敏演出、入江洋祐出演

木下順二は、1950年に起きた「徳田要請問題」を素材にしてロシア語通訳の一人の青年を国会に呼び、その青年を“アカ”にしたてようと追求し、真実が通らない現実に青年は自殺していく姿を”蛙“の世界に置き換え、下山・三鷹・松川事件のさなか、「日本人が日本人として生きるには」を私たちに投げかけた名作でした。

1971年には宮沢賢治の原作を広渡常敏が脚色した「グスコー・ブドリの伝記」、入江洋祐主演。「風任せ波任せお天気まかせの暮らしから抜け出そう。背筋をぴゅんと伸ばして歩き出そう」と3年続きの飢饉の中、ブドリは呼びかけます。爽やかなブドリを中心に俳優たちの輝かしい瞳は生きている人間の顔が感じられ、宮沢賢治の大人の童話が、私たちにたくさんの感動を与えてくれた名作でした。

1974年 W・ギブソン作、広渡常敏演出「奇跡の人－ものには名前がある」、辻由美子主演。音と光を失ったヘレン。アニー・サリバンはそのヘレンに流れる水に「water」と指文字は限りない人間の可能性を感動的に感じさせる名場面です。誰もが知っているヘレンの目覚め、そのために人間の可能性を信じたサリバンの激しい闘いは「奇跡の人」として演劇の名作として人々の胸に語り続けられています。多くの女優が挑んだアニー・サリバン。私にはどの女優よりもこの辻由美子のサリバンが最も素晴らしく思っています。

1975年 木下順二作、広渡常敏演出「オットーと呼ばれる日本人」、塚本信夫主演。

1930年代の上海から40年代の日本へと戦争への道を突き進んでいった日本にあって、内閣内にいて日本の戦争への道を止めさせようとした日本人（尾崎秀実がモデル）。ゾルゲ（コミンテルン国際スパイ団の一員）と協力して日本人として不可能に近い道を模索するオットー。いわゆるゾルゲ事件をモデルに60年代安保の民衆たちの抵抗運動を背景に、日本の在り様、日本人とはを問いかけた壮大なドラマは、そのドラマのリアルさも含め、俳優たちのアンサンブルも加わって、壮大な感動を与えてくれた。演劇史上の名作です。

紹介した舞台は、ロシア語通訳の青年、宮沢賢治、アニー・サリバン、尾崎秀実といずれも時代や状況に懸命に向き合って生きていく人間の姿はそのドラマを通して多くの励ましや勇気を与えてくれました。

こんな劇団にいた神田香織さん、今度は講談をとおしてどんな励ましや喜びを与えてくれるでしょうか。愉しみですね。

新年早々、おしゃれな喜劇を楽しみませんか （2024.2）

ヴォードヴィルのスター加藤健一と佐藤B作の最高傑作

（第47回菊田一夫演劇賞、第64回毎日芸術賞）

米田 哲夫（竹の台）

ニューヨークの古びたホテル、かつてヴォードヴィルの大スターだったウイリー（加藤健一）は悲惨な生活を送りながら役者として復活したいともがいていた。そんなおり、ウイリーのもとへ仕事が舞い込んでくる。ウイリーは引き受ける条件として元相棒のルイス（佐藤B作）を指名する。

さて、11 年ぶりとなる名コンビの復活はなるのか。

作者ニール・サイモンは、1917年ニューヨークに生まれ、おそらくアメリカの作家で、「ニール・サイモンの第二章」と作品名の前に作家の名前が付けられるのは彼ぐらいだろうと言われるほどブロードウェイの喜劇王である。神戸では1985年にテアトル・エコーによる『サンシャイン・ボーイズ』

（熊倉一雄主演）、88年に同劇団の『プラザ・スイート』（熊倉一雄主演）、96年文学座の『噂のチャーリー』（角野卓造主演）、2000年には、NLT『裸足で散歩』（渋谷哲平主演）が上演されていて、どの作品も爽やかな喜劇の楽しさを味わっている。加藤健一事務所は89年に『第二章』を上演している。「第二章」は妻を亡くした作家と離婚したばかりの女優と二人の物語です。淋しく美しいラブ・コメデイ加藤健一、高畑淳子のしゃれたセリ
フに感動した舞台で再演が期待されている。その好評に応えて、翌年に加藤健一事務所は加藤・高畑コンビでの「セイムタイムネクストイヤー」（作：バーナード・スレイド）で、大人のおしゃれなおとぎ話を私たちにクリスマスプレゼントしてくれた。

少しばかり加藤健一と加藤健一事務所を紹介します。
加藤健一は1947年に生まれ、1968年に俳優小劇場養成所に入り、70年に卒業してつかこうへい事務所へ入団して俳優として演技力を磨き、1980年に一人芝居「審判」上演のために加藤健一事務所を設立する。加藤事務所では加藤健一は演出、照明、音響、衣装、美術、等々すべてプロデュースしてユニークな演劇活動を展開する。地方公演も活発に行い、神戸でも一時期オリエンタル劇場での公演も行い、その後、神戸演劇鑑賞会での上演も行うようになる。その公演は私たちに、今までにないおしゃれな喜劇・演劇の楽しさを味合わせてくれた。

神戸では、1994年に「ブラック・コメデイ」（作：ピーター・シェフアー）加藤健一主演。2004年には、「全て世は事も無し」（作：オズ・ボーン）加藤健一、山口果林。2008年「音楽劇詩人の恋」（ジョン・マランス）加藤健一。2012年「皮を超えて、森を抜けて」（ジョウ・ディピエトロ）加藤健一、竹下景子。と世界の素敵な喜劇を日本に紹介し続けています。

佐藤B作についても少し紹介します。
1949年、福島県に生まれる。1973年に東京ヴォードヴィルショーを結成。妻は女優のあめくみちこ。
2009年に「見上げてごらん夜の町を」（作：中島敦彦）佐藤B作、あめくみちこ出演。2011年には「アパッチ砦の攻防」（作：三谷幸喜）佐藤B作、角野卓造出演で上演している。

「サンシャイン・ボーイズ」－加藤健一事務所公演
2月 9日（金）18：30
2月10日（土）13：30 いずれも神戸文化ホール（中）で上演します。

連絡は、竹の台4丁目9－11 米田 哲夫まで（090－8658－8579）よろしく。

70周年を迎えた神戸演劇鑑賞会　（2024.4）

米田 哲夫（竹の台）

戦後間もないころ、うたごえ運動、労音、映画サークル、そして労演が誕生して若者たちがその担い手として文化運動に参加しました。1949年に全国で初めて演劇鑑賞組織大阪労演が生まれ、その5年後の1954年に神戸と名古屋に同様の組織の勤労者演劇協議会（会員が会費を持ち寄り誰の手も借りない会員主体の自主的な演劇鑑賞団体）が発足しました。数えて70年。その間、700回の演劇上演してきている。私は1962年以来、62年ほど演劇を鑑賞してきました。そして、このHPを活用させてもらって幾つかの演劇を紹介させてもらいましたが、まだ、紹介しきれてない感動の舞台がいくつかあるので、記憶をたどって紹介していきます。

この6月に前進座公演「文七元結」（三遊亭圓朝原作、小野文隆演出）が上演されるのにちなんで、76年に上演された『さぶ』（山本周五郎作十島英明演出）江戸下町の職人の物語（前進座はすでにNO. 23の中村梅之助で紹介しています。）ぐずでとんま、能無しと言われるさぶ、男前で頭がよく切れる栄二の二人が励ましあっていく若者の物語。ひょんなことから店を追い出され身を落とす栄二を辛い世界を知っているさぶが励ましていく。周五郎のどん底に落ち込んだ人間の励ましや温かみを感じさせてくれる舞台。前進座の若手俳優の気取らない演技が、当時の若者たちに生きていく優しさや共感を覚えさせてくれた名作で、今もなお語り告げられています。97年にも舞台が再演されています。

古くなりますが、66年の『天平の甍』（井上靖作、宮川雅青・小宮一郎演出）。まだ発展途上にあった日本、新しい文化を取り入れようと当時の大国中国へ遣唐使を派遣していました。日本の若い僧たちが、身を賭して国のために中国へ渡り、命がけの使命感は20余年かけて高僧鑑真を迎えます。来日した鑑真は目を失いながらも唐招提寺を建立させていく物語です。河原崎長十郎、中村かん右衛門、河原崎国太郎たち前進座創立者たちの熱演もあって大きな感動を与えた舞台でした。私はこうした苦難に満ちた日中の交流の歴史見るとき、今日の不安定な日中時代、天平のような日中の文化や政治の平和な交流が求められているといつも感じています。

からゆきさん　（2024.4）

米田 哲夫（竹の台）

最近、若い女性の海外売春が横行していることを報道で知りました。ふと、明治から大正期に“からゆきさん”と呼ばれた「海外売春婦」がいて、その人たちが舞台になった芝居を思い出した。その代表作は山崎朋子作の「サンダカン八番娼館」です。文化座が78年、93年と二度上演しています。底辺女性史を研究する女性（佐々木愛）が、天草で貧しい老婆（鈴木光枝）に出会う。だれも上がろうとはしない老婆の部屋で昼寝までしてしまった女性。そこから、老婆との交流がはじまる。天草は土地が痩せていて、貧しい農家が多く、徳川時代から明治にかけて底辺女性を利用して「からゆきさん」として南の国へ売却されていった。「からゆきさん」とは，「唐人行」（からゆきひと）または、「唐ん国行」（からんくにゆき）という言葉から来ていて、わが身を売った海外売春婦を言う。舞台は貧しい部屋で語り合う二人の親密感が、光枝・愛という母娘の二人の女優の親しみ感でいっそう深まり、私たちを感動の世界に染みこませてくれました。ちなみに、天草に隣接する島原半島南端に口之津民族資料館があって、「からゆきさん」の歴史が展示されている。また、「サンダカン八番娼館」は熊井啓が監督をして田中絹代、栗原小巻のコンビで映画化もされています。

文化座は1981年に山崎朋子作の「あめゆきさんの歌」も上演しています。明治時代中頃家を助けるために、山田わかはアメリカへ女中奉公として渡るが、白人専門の売春婦に売り飛ばされます。わかはサンフランシスコの山田塾で英語を学び、帰国後明治の末、婦人運動に参加していく。作者、山崎朋子は雷鳥など経済的に豊かだった婦人活動家でなく、底辺から生きのびた山田わかに焦点をあてて「あめゆきさんの歌」を描いた。わかは語学中心の学問を社会に生かし、当時の婦人解放運動に参加していきました。後年には売春婦の厚生施設に全力を注ぎます。文化座の伝統ともいえる底辺に生きた女性を描いたこの舞台は、「土」「荷車の歌」で主演した鈴木光枝によって多くの感動を与えた。公演の前日、出演者全員参加の「あめゆきさんの歌」の前夜祭が行われたことも記しておきます。

1977年の青年座公演、宮本研作の「からゆきさん」（石沢秀二演出）は、時代と向き合う海外売春婦として宮本研は描きました。貧しい天草は海に向き合って世界に広がる天草でもありました。小学校の校庭で出会ったパラソルの女性に上海連れてってと頼むところから舞台は始まる。シンガポールの日本人娼館はマレー人、インド人、中国人、白人を相手にする女性たちの稼ぎ場でした。日露戦争も勃発、国防献金のために女たちを稼がせ、国へのご奉公をなしとげていくが、娼館廃止と共に女たちは本国へ強制送還されていきます。女たちは国の決定にさからってさらに南の島へ出かけていく。「棄てられたら、棄て返せ」の娼婦の言葉は、果たして今日に生きる私たちが、国か

ら棄てられたら、「棄て返せ」というほどの生きざまがあるだろうかと当時、私たちは「からゆきさん」から突き付けられたのを思い起こします。天草で生まれた宮本研は「からゆきさん」に何を託したのだろうかと考えさせられた舞台でした。青年座の東恵美子、初井言栄、今井和子たち優れたら女優陣は「からゆきさん」の舞台をいっそうもりあげてくれました。前述した口之津民族資料館を訪問した私は、すぐ前の天草も旅した。宮本研が通った小学校（パラソルの女性）も訪れ、海に面した宮本研顕彰の碑にも訪れて「からゆきさん」と宮本研を偲びました。

足尾銅山から水俣へ（2024.6）

米田 哲夫（竹の台）

依然として環境省の水俣患者への対応は冷たく、PFASへの行政の対応も鈍く、公害問題は21世紀になっても大きな課題となっています。

公害問題の原点ともなる舞台が神戸で上演されているので紹介したいと思います。まず最初は、1970年に高橋治作・xz演出、泉座公演「告発」です。

1970年代、日本が高度成長を成し遂げようとしていた時代、水俣の海は静かで美しい海だった、魚や貝は取り放題だった。しかし、その海は新日本窒素（株）が工場廃液を垂れ流した海だとは誰も知らなかった。自治体は市会も財政も窒素によって従事られており、水俣病へは目を背けていた。そこへ漁業組合が立ち上がり、熊本大学も水俣病の原因は有機窒素にあると窒素の廃液であると発表するに至っていきます。漁業組合は何度も内部の分裂や抗争に明け暮れていきますが、熊大の粘り強い研究や新潟水俣病の闘いに励まされ水俣の人々は再び立ち上がっていくのでした。まさに70年代初頭、私たちが高度成長に浸っているときに、作家高橋治と劇団は窒素を厳しく告発すると同時に、70年代に浸っている私たちをも「告発」したのでした。「老婆が出刃包丁を研ぎながら『会社の人たちに死んでもらう』は強烈に胸に刺さってきた」「私たちの国が世界第二位の工業生産国になった影にあんな悲惨なことがあったとは…恐ろしく震えている」「この芝居で水俣病の実態を知っただけでなく、今の日本で人間らしく生きていくためにみんなが強く利巧にならなくちゃと痛切に思った」と舞台の感想は、自らをも指す、素晴らしい感想が寄せられた。

考えてみれば「強く利巧にならなければ」は今日の社会状況を見るとき、「人間らしく生きていくために」今も私たちに響いてくるものです。最後に水俣そのものを真正面に掲げて舞台を作った作家、劇団、俳優たちに拍手を送ります。

ちなみに、最後に柩作家高橋治氏は、小津安二郎に師事した映画監督で、のちに作家となり美しい文章の「風の盆恋歌」等々を書いています。ぜひお読みください。

次に、73年、宮本研作、観世栄夫演出青年座公演「明治の柩」を紹介します。

利根川の支流、渡良瀬川流域の農民は足尾銅山が垂れ流す鉱毒と森林の伐採による洪水に悩まされ続けていた。明治30，31年明治政府への請願デモがあい次ぎ、あわや警官隊と衝突されよ
うとしたとき、旗中村の名主で民党議員旗中正造（田中正造）（小松方正客演）が駆けつけ「私に任せよ」と説得。しかし、政府はなんら関知せず。それでも、若い農民たちが請願に立ち上がる。こうして日本最初の鉱毒事件が始まる。旗中正造の天皇への直訴を始めとして、明治という時代をさきがけの社会主義者豪徳（幸徳秋水）やキリスト教徒岩下先生（木下尚江）そして旗中村の若者たちが明治という時代に立ち向かっていく。このころからも企業・銅山側は民衆の切り崩しは行っていて、鉱毒反対運動は尻すぼみになっていく。旗中正造が描いた「一大自治村」の夢は消えるが、村の若者たちはバイブルと大日本国憲法をもって、官憲の前に立ちはだかる。やがて明治は終わり、暗い舞台の中、一つの白い旗中の柩を前にして妻は「旗中は人様の中で暮らし…死んだ男です。どうぞ旗中を叱る言葉をかけてやってくださいませんか」と客席に語りかけます。衝撃のラストです。宮本研は明治そして近代を私たちがどう見てるのかを、鉱毒事件を通して問いかけてくるのです。

そして何よりもこの時代からこの事件で動き始めた民衆・若者たちを創出して未来をも問いかけてきます。いくつかの感想を紹介します。「一幕の終わり旗中と豪徳の出会いの場，ほの暗いランプの和室。ここにきらりと光る本当の芝居を私は見ました」「最後に柩の前で語る妻の言葉が私の心をとらえました。他の人はどのような言葉を旗中に投げかけたのであろう」「歴史の重みを感じた芝居でした。その生涯を生き抜いた人々を見て、その上にある今日の私たちのこの時代。改めて考えさせられた。」

ちなみにまだ若き俳優西田敏行は旗中村の若者の一人として神戸の舞台に立っていた。

次回からこの宮本研が明治・大正・昭和の中で生きた民衆の舞台を紹介します。

一人芝居の魅力　（2024.8）

米田 哲夫（竹の台）

2か月前には宮本研の作品を紹介しますと述べましたが、その中での一人芝居を紹介します。すでに、一人芝居の名作：井上ひさし作、木村光一演出、渡辺美佐子主演「化粧」は紹介しました。宮本研も一人芝居を書いています。井上ひさしの「化粧」と同じ時期に「女ひとり芝居」として書かれました。かって満州・ハルピンで日本人親子4人が夢のような暮らしをしていたが、日本の敗戦により突然幸せは破られ、満州で夫と娘を失って、息子も途中で失い、日本に引き揚げてきた。中国からの残留孤児を伝えるラジオを聞きながら女は満州のこと、夫とのことロシア軍のことを語り始めます。「誰です。そこにいるのは、出ていらっしゃい」と、すると聞こえてくるのです。「古里もとめて花いちもんめ…あの子がほしい…あの子じゃわからん…負けて悔しい…はないちもんめ」。浅利香津代が一人で語り、泣き、怒り、歌い、そして三味線を弾いて、残してきた娘を偲び、詫びて、私たちに迫ってくるのです。舞台には浅利一人、満席の客席は息一つするの怖いくらい、緊張している。一人芝居の絶頂の世界です。私たちは浅利香津代を通して、日本が中国で何をしてきたか、あの戦争は何だったかを考え、学ぶのです。戯曲、演出、俳優、客席が作り出す素晴らしい空間です。

A級戦犯の東京裁判が行われていた時代、BC級戦犯がシンガポール・チャンギー刑務所で裁かれます。「風の如くに一戦犯死刑囚の手記より」が金子良次演出により松山政路（父は前進座河原崎国太郎、兄は俳優松山英太郎）の一人芝居が上演された。上官の指令に従い、捕虜虐待や住民虐待に問われた BC 級戦犯として死刑を宣告された. その手記を通して、加害や戦犯を突き付けられ日本人の戦争への関わりを考えさせられます。感想の「一言も聞き漏らさないと身を乗り出して観た」にあるようにこの舞台も客席と舞台は緊張に覆われていました。

一人芝居は神戸以外では、白石加代子、佐々木愛、加藤健一、江守徹、津嘉山正種たちといくつか見てきたが、どの舞台も前にも述べましたように見る私たちの想像力を掻き立てる俳優との緊張関係は芝居の醍醐味を味合わせてくれました。

追悼－西田敏行　（2024.8）

米田 哲夫（竹の台）

俳優西田敏行さんが亡くなりました。
10月17日、76歳でした。

テレビでは盛んに追悼番組が行われ多くの人がお別れの言葉を送った。報道では西田敏行さんは、映画俳優、テレビタレント、歌手として多くの人々を楽しませてくれました。そもそも、彼は舞台俳優でした。

すでに4年前にこのHPで「神戸の舞台に立った俳優」として紹介していますが、再度西田さんのデビューを紹介します。1970年に新劇団劇団青年座に入団しています。2年後、72年、矢代静一作、石沢秀二演出「写楽考」に主演し、京阪神の労演で上演されました。西田さんは、台本を読んで「俺にしかできないと自信たっぷり」で、神戸は旧の国際会館大ホール（2000人収容）で大熱演、満席の観客をうならせました。大阪、京都も大好評でした。まさにここに舞台俳優西田敏行さんの誕生でした。私たちは類いまれな俳優に大きな拍手を送りました。以後、西田さんは79年「盟三互大切」（かみかけてさんごたいせつ）鶴屋南北作、石沢秀二訳・演出。若山富三郎、木の実ナナ共演。81年「冒険ダン吉の冒険」宮本研作、五十嵐浩二演出。82年「江戸のろくでなし」矢代静一作、鈴木寛一郎演出、高畑淳子、田中邦衛共演。と神戸での出演で、優れた演技力は観客を魅了しました。

いうまでもなく、舞台俳優はけいこ量の豊富さ、セリフ、動き、共演の俳優とのアンサンブルなどが鍛えられ、優れた役者として育っていきます。

西田敏行さんはこうした劇団での俳優としての鍛錬が、のちのちのあの西田敏行さんを生み出したのではないかと私は信じています。

ご冥福をお祈りします。